

---

# 福島県湯川村堂畑地区 調査報告書

---

2016年度福島県大学生の力を活用した集落復興支援事業



2017年2月1日

福島大学行政政策学類

福大ゆがわ調査隊

# 目次

序章 調査の目的と概要	
第1節 調査の目的	p. 2
第2節 調査の概要	p. 2
第3節 活動の内容	p. 3
第1章 湯川村の概況	p.10
第2章 堂畑地区の概況	
第1節 概況	p.15
第2節 農業経営について	p.21
第3章 堂畑地区の住民意識一戸別聞き取り調査から	
第1節 農業経営・経営農地の承継について	p.27
第2節 集落の役割と課題について	p.30
第3節 今後の地域活性化について	p.32
第4節 まとめ・考察	p.34
第4章 堂畑地区住民アンケートの結果と考察	
第1節 住民アンケート調査の概要	p.36
第2節 住民アンケート調査結果	p.37
第3節 クロス集計結果	p.48
第4節 アンケート調査のまとめと考察	p.51
第5章 道の駅消費者アンケートの結果と考察	
第1節 「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」の概要	p.52
第2節 アンケート集計結果	p.52
第3節 道の駅アンケート調査結果をふまえて	p.71
第6章 まとめと考察	
第1節 全体を通じて	p.73
第2節 活性化の方向性について	p.74
第3節 地域資源	p.79
第4節 道の駅と生産者の関係づくり	p.83
第5節 おわりに	p.83
第7章 フィールドワークの感想	p.84

## 序章 調査の目的と概要

### 第1節 調査の目的

東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故から、6年が経とうとしている現在でも、福島県は震災以前に比べ、生活は変わり、その影響を受け続けている。生活基盤の再構築やコミュニティの再生などは少しずつ進んでいるものの、過疎地域にある集落では、高齢化、若者の流出など以前から問題となっていた課題が一層深刻化している。

私たちは、福島県地域振興課の委託事業「平成28年度大学生の力を活用した集落復興支援事業」に応募することで、このような状況下で学ぶ大学生として、集落が少しでもより良い方向に進むよう何らかの取り組みができないかと調査を行った。調査先は福島県湯川村の堂畑地区である。堂畑集落は高齢化、後継者の他出による集落や農業の維持問題、空き家などの課題を抱えている。私たちは、これらの問題解決に向け、実際の地域づくりの現場に参画し、地域住民の皆さんとともに課題に向き合い検討を重ね、地域再生のための計画づくりと実行に向けた取り組みを考えるために、現地調査を行った。

さらに、ゼミのテーマでもある地元学的手法を用いて集落の魅力の発見活動も行った。「地元学」とは「ないものねだりではなく、あるものさがし」をすることで、地域の中に隠れている良さや、地元の人々が持っている力を引き出し、それらを地域づくりに役立てていくというものである。そのために私たちは地域の課題や問題だけに目を向けるのではなく、地域の中にある「お宝」を探し、堂畑地区の潜在能力を「見える化」するために地域資源マップを作成した。

### 第2節 調査の概要

調査は、戸別聞き取り調査とアンケート調査のほか、湯川村内で営業している「道の駅あいづ湯川・会津坂下」での利用者アンケート調査も行った。戸別聞き取り調査には31件の住民の方にご協力いただき、一戸あたり2~3名の学生グループが実際にご自宅に訪問させていただくか、公民館でお話を聞くなどの形で行った。一世帯あたり90分で実施する予定であったが、多くの世帯で時間を上回りとても積極的に協力していただいた。

また、アンケート調査は、高校生以上の住民を対象に実施した。戸別聞き取り調査の際に家族の構成員人数分の調査票と返信用封筒を配布し、郵送により79件の回答を得ることができた。

道の駅でのアンケート調査については、2016年10月9日にギネス世界記録「同時におにぎりを作った最多人数」に挑戦するというイベントに参加させていただいた際に、来場したお客様にアンケート票を配布し、調査を実施した。湯川村村内の方だけでなく、県内外から多くの方が来場していたため、幅広い回答結果を得ることができた。

3種類の調査方法をとった理由は、性別や年齢によらず多くの住民の方々の意見を把握するためである。聞き取り調査では住民の方の声を生で聞くことができるが、世帯主の方の意見が中心になってしまう傾向にある。そのため集落の将来にとって必要不可欠な若い世代の住民の方や女性の方の意見も把握したいと思い、アンケート調査も併せて実施した。

道の駅でのアンケート調査は村内の人や県内外の人にとって道の駅はどのような目的で利用されているのか、道の駅の存在はどのようなものか、また食や農、湯川村に対する考えやイメージを把握するために行った。農家が多い湯川村や堂畑地区にとって、道の駅との関係づくりは今後の活性化に向けて欠かせない要素となる。道の駅の駅長さんが堂畑地区の方ということもあり、道の駅との連携による地域活性化という点も考えながら調査を行った。

### 第3節 活動の内容

2016年6月14日 予備調査 役場訪問、堂畑の方と顔合わせ、道の駅見学

予備調査ではまず役場を訪問し、三澤村長から湯川村の特徴や課題についてお話をいただいた。また地域振興課の方からふるさと納税や人口のデータといった村の概要について説明していただいた。そして役場から堂畑の公民館に移動して堂畑地区の役員さんとの顔合わせを行った。堂畑地区の行事や現状を説明していただくとともに、これからどのように調査をしていくのか検討を行った。最後に「道の駅あいつ湯川・会津坂下」に移動して道の駅についての説明をしていただいた。私たちも買い物をしたが、会津や湯川村の商品が多く地域に根差した道の駅をコンセプトにしていることが感じられた。

9月3日～9月5日

本調査1日目 聞き取り調査

私たち学生参加者18人は、6つの班に分かれ、それぞれの班が公民館やご自宅に伺い、聞き取り調査を行った。聞き取り調査ではあらかじめ準備した質問項目以外にも堂畑の現状について生の声を聞くことが出来た。



(聞き取り調査の様子)

## 2日目 村民運動会

湯川中学校で、湯川村集落対抗運動会が開催された。私たち福島大学の学生もオープン参加させていただき、運営のお手伝いも行った。集落ごとに異なる応援やユニフォームがあり、集落の団結力を感じた。今年は福島ホープスのチアリーダーの方々が応援に駆け付け、一層盛り上がった。



(村民運動会でのゼミ集合写真)



(福島ホープスのみなさんとの記念写真)

## 子供神輿

午後は、堂畑集落の子どもたちが法被を身に付け、掛け声と太鼓の音を響かせながら、集落の各家を回った。お神酒などの独自の伝統的な慣習があり、学生も一緒になって補助という形で参加した。



(子供神輿の様子)

## バーベキュー大会

住民の方や役場の方と協力して準備を行った。学生はカキ氷やビールの提供のお手伝いした。今回は特別ゲストとして三澤村長が参加して下さった。様々な出し物があり歌や楽器の演奏の披露、福大ジャグリングサークルも出演と大いに盛り上がった。またバーベキューでは、聞き取り調査では会うことが出来なかった同年代の住民の方々と直接話すことが出来た。その話の中では、進学を機に他出する友人が多いことに問題意識を持っている人が多かった。子供神輿とバーベキュー大会にはたくさんのお子さんが参加していたので、これから進学を機に他出した人が将来堂畑地区と関わりを持ち続けられるよう、こうしたイベントを続けることが大切だと感じた。



(バーベキュー大会の様子)

### 3日目 聞き取り調査

1日目に引き続いて聞き取り調査を行った。前日の村民運動会やバーベキュー大会に参加したためか、聞き取り調査では堂畑の良さや課題について様々な意見を聞くことが出来た。ご自宅訪問の際には夏野菜を使った料理を出して下さったお宅もあって、農作物の品質の高さを改めて感じた。



(最終日の集合写真)

10月9日 新米祭り

道の駅あいづ・湯川・会津坂下にて新米祭りが開催され、私たちは、堂畑マルシェを開催して堂畑産の野菜の販売を行った。また、おにぎりを一度に握った人数のギネス記録づくりの補助を行った。悪天候の中たくさんのお客さんが来てくださり、ギネス記録を認定する事が出来た。堂畑産の野菜は県内外のお客さんから好評であったという間に売り切れてしまった。



(新米祭りでのゼミ集合写真)

(堂畑マルシェの様子)

図表 堂畑マルシェにおける出荷リスト

農家番号	品目	品種	数量	単位	特徴	
1	玉ねぎ	アトン	17袋	2個ずつ	歯切れよくジューシーで柔らかい	
	さつまいも	紅あづま	13本	1本	ほくほく、甘くて美味しい	
	さつまいも(小)		6本	2個ずつ		
	かぼちゃ	ナガチャン	2個	1個	皮が薄くて長持ちする	
	人参		3袋	3本ずつ		
	人参(小)		6本	1本		
	2	じゃがいも	アデスレット	10袋	4個ずつ	ポテサラダ、フライドポテ
		枝豆	秘伝	8袋	200gずつ	サヤが大きく、豆の味が強い
		キャベツ	やまびこ	5個	1個	肉質が柔らかい
		きゅうり	なるなる	7袋	4本ずつ	茎まで食べられる
ミニ白菜		お黄にいり	10袋	1個	ミニサイズで保管が便利	
スティックブロッコリー			6袋	1個		
ミニチンゲン菜		シャオバオ	5袋	7本ずつ		
二十日大根		雪小町、さくらんぼ	5袋	10本ずつ		
サニーレタス			5袋	1個		
春菊		中華	7袋	1個		
ムラサキ玉ねぎ	赤たまサラダ	5袋	3個ずつ			
ピーマン		10袋	8個ずつ			
ムラサキキャベツ		5個	1個			
3	さといも					
	じゃがいも	紅あかり	10個	1袋	赤い皮と真っ白い中身。しっとりホクホク	
4		とうや	10個	1袋	皮がむきやすく、カレーや肉じゃがなどがおすすめ	
	かぼちゃ	甘龍	2個	1個	ホクホク感が強く、皮も果肉もソフト	
	ブロッコリー		11個	1個		
5	赤かぼちゃ	金山かぼちゃ	2個	1個	甘味が強くホクホクした食感	
6	ねぎ		10袋	4本ずつ		
	じゃがいも	キタアカリ	10袋	6個ずつ		
7		メークイン	2袋	12個ずつ		
	ねぎ		27袋	4本ずつ		
8	さつまいも					
	ねぎ					
9	長ねぎ		18袋	3~4本ずつ		
10	さつまいも		14袋	2本ずつ		
	さつまいも(大)		14袋	1本		
11	長ねぎ		10袋	3本ずつ		
12	ジャガイモ	紅あかり	8袋	4個ずつ		
	さといも		25袋	4個ずつ		

11月11日 収穫祭

堂畑で収穫されたもち米を使って住民の方と学生が一緒になって餅つきを行った。餅以外にも堂畑産の野菜を使ったけんちん汁や漬物などを囲みながら交流することが出来た。お餅は4種類準備していただき、なかでも、豆腐餅という今まで食べたことのない味付けがとてもおいしかった。食事の前には役場の健康福祉課の方とポラリス看護学院の生徒の方による健康体操を行った。また住民の方々と意見交換を行い、その意見の中で子供たちが進学を機に堂畑地区を離れてしまうという意見と、若い世代の人たちが堂畑地区に魅力を感じているのではないかと意見が出て議論が盛り上がった。



(お餅を囲んで意見交換をしている様子) (健康体操の様子)

#### 道の駅あいづ・湯川・会津坂下での聞き取り調査

収穫祭が終わってから、私たちは道の駅にて駅長さんに聞き取り調査を行い、その中でこれから出荷者や出荷品目を増やしていくためにどうすべきか意見交換をした。道の駅としては、消費者の方により良いサービスを提供することに主眼を置かなければならないので、出荷を増やしていくためには行政の協力も必要だと感じた。また、ほかの地域の道の駅と比較した「道の駅あいづ・湯川・会津坂下」の特徴などをお聞きすることが出来た。特に道の駅でのイベントの多さや会議の場としての利用が多いという点は、この道の駅が人が集まる場として機能していることを示しており、今後の地域活性化の一つのカギになるのではないかと感じた。





(道の駅あいづ・湯川・会津坂下での聞き取り調査の様子)

#### 2017年2月11日 活動報告会 地域づくりオープンカフェ

これまで行ってきた調査結果を取りまとめて、県主催の地域づくりオープンカフェにて発表を行った。他大学の学生による発表を聞いて自分たちの活動にもつながる情報をたくさん得ることが出来た。また様々な地域からお越しいただいた聴衆の方々に堂畑地区をPRすることが出来て良かった。



(地域づくりオープンカフェでの記念撮影写真)

## 2月21日 現地報告会

堂畑地区集会所で行われた現地報告会では、私たちが一年間行なってきた活動を堂畑の住民のみなさんの前で発表し意見交換を行った。そこでは、「来年度以降も継続して活動を行なってほしい」、「世帯主だけでなく若者の意見が聞けるようなアンケートも実施した方がよい」、「地区の行事を行う際に若い世代が上の世代の意見に縛られている部分があるのではないか」、「地区の行事に未婚の人が参加しにくい雰囲気がある」、「兄弟分はあるが活動が少なくなっているのでSNSなどを利用してもっと頻繁に連絡を取った方がよいのではないか」、「大学祭で堂畑マルシェを行う際には住民も参加して盛り上げたい」といった前向きな意見をいただくことができた。発表後の懇談会でも、私たちが考えた提案に対して住民の方々が協力的な意見を出してくださり、来年度以降の活動が楽しみになった。



(現地報告会での懇親会の様子)

## 第1章 湯川村の概況

### 1. 湯川村の位置と気候

湯川村は福島県河沼郡、会津盆地の中心に位置している。周りは西に会津坂下、北に喜多方市、南に会津若松市と接している。公共交通機関としてはJR磐越西線笈川駅また会津乗合自動車株式会社が会津若松市と湯川村間での路線バスを運行している。村内に高速道路ICはないが、磐越自動車道会津若松ICから国道121号線を通って10分程度で湯川村に行くことができる。2015（平成27）年には、自動車専用道路の会津縦貫北道路が開通し、喜多方方面に行くのも便利になった。

村の面積は16.37 km<sup>2</sup>であり、次に小さな市町村が中島村の18.92 km<sup>2</sup>で、湯川村が福島県内で最も小さな自治体となっている。標高は180mであり、村内には一切山がなく平坦である。東に秀峰・会津磐梯山を望むことができ、北端に日橋川、西端に阿賀川（大川）が流れている。

気候は内陸性気候のため、冬は早くから雪が降り、寒気が厳しいが、盆地の影響を受け、夏は気温が上昇し、昼と夜の気温差がかなり大きくなる。

図表 1-1 湯川村の位置



福島県湯川村公式ホームページ

<http://www.vill.yugawa.fukushima.jp/soumu/access.html> より

### 2. 人口

2015（平成27）年国勢調査によると、湯川村の人口は3,207人、世帯数は906世帯と

なっている。1947（昭和 22）年の 5,917 人をピークとしてその人口は年々減少の傾向を辿っている。1985（昭和 60）年の人口（3,811 人）と比較すると、2015（平成 27）年には 1 割程度減少しており、村高齢化率も 1990（平成 2）年から 10.0 ポイント上昇し、県高齢化率 よりも 14.2 ポイント高い結果となっている。

図表 1-2 湯川村の人口及び世帯数と高齢化率

区分	平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年
人口(人)	3,683	3,642	3,601	3,570	3,364	3,207
世帯数	823	835	875	904	915	906
村高齢率	20.7	25.4	27.2	28.4	28.7	30.7
県高齢率	14.3	17.4	17.1	22.7	25	28.5
国高齢率	12.1	14.5	17.3	20.1	23.1	26.6

（人口及び世帯数、高齢化率等は 2015 年「国勢調査」より）

### 3. 文化

以下の内容は湯川村ホームページを参考に記述したものである。

湯川村の文化の象徴として東北を代表とする古刹の勝常寺がある。勝常寺には、国宝及び国重要文化財 12 軀を含めて 30 余軀の仏像がおさめられている。807 年に法相宗の碩学徳一上人によって開かれ、これだけ多くの平安初期の仏像が一カ所に保存されているのは日本国内でも珍しく、県内外から多くの参拝客が訪れる。

勝常寺において毎年 4 月 28 日薬師如来の祭礼が開かれ、先祖の供養と五穀豊穰を祈願し、「勝常念仏踊り」が奉納される。戦後一時期は中断されていたが 1983（昭和 58）年に有志によって復活し、県の重要無形民俗文化財に指定されている。

村内には中世鎌倉時代初期の古城塁址である北田城跡、中世から近世にかけて会津盆地の中央から会津北部を抑える拠点であったと考えられる浜崎城跡が残っている。ともに村指定文化財となっている。

湯川米の PR を目的として 10 月上旬に道の駅あいづ湯川・会津坂下で「新米まつり」が開催される。内容は昔ながらの鎌を使った稲刈体験や新米の試食、旬の野菜や特産品の販売がされる。また、2016（平成 28）年はギネス世界記録「同時におにぎりを作った最多人数」が行われた。

### 4. 産業

村の産業別就業人口(2010 年国勢調査)は、第一次産業が 22.9%、第二次産業が 24.3%、第三次産業が 52.7%であり、福島県平均(第一次産業 7.6%、第二次産業 29.2%、第三次産業 60.0%)と比較すると、第一次産業が県平均の約三倍というとても高い割合であるのが特徴的である。基幹産業の農業は稲作を中心に、野菜、畜産、花卉などを組み合わせた複合経

営によって営まれている。米が村の特産品となっており、村で取れた「湯川米(コシヒカリ)」は年々全国的に知名度を上げている。稲作が主力産業ということもあり水田が多く、村の総面積の約 60%を占めている。野菜は夏秋のトマト、キュウリ、グリーンアスパラガスなどが市場に出回っている。他に特産品としては 100%湯川村産の大豆で作る純国産手作り味噌や、無添加・無着色のいちごジャム、イナゴの佃煮などがある。村全世帯の 6 割近くを農家が占めており、大半が専業ではなく兼業である。

## 5. 農業

以下では主に 2015 年農林業センサスのデータにおける湯川村の数値から、同村の農業の特徴を述べていきたい。

まず湯川村で農業を行う販売農家(経営体)は 344 で、ほとんどが家族経営体である(2 経営体は組織経営)。農業就業人口の年齢については福島県の平均年齢が 67.1 歳となっていて、湯川村は県平均よりも 2.5 歳高い 69.6 歳となっている(図表 1-3)。年齢階層別にみても、65 歳以上の比率が 73.0%であり、福島県(65.2%)をやや上回っている。

図表 1-3 年齢別農業就業人口(販売農家)

	計	30 歳未 満	30 歳～ 49 歳以 下	50 歳～ 64 歳以 下	65 歳以 上	うち 75	平均年齢 (歳)
						歳以上	
湯川村 (人)	486	4	12	115	355	159	69.6
(%)	100.0%	0.8%	2.5%	23.7%	73.0%	32.7%	
福島県 (人)	77,703	2,414	4,735	19,878	50,675	25,576	67.1
(%)	100.0%	3.1%	6.1%	25.6%	65.2%	32.9%	

(2015 年農林業センサス)

湯川村の平均経営耕地面積は 3.23ha であり、福島県(2.73ha)を 0.5ha 上回っている(図表 1-4)。5ha 以上の経営 13.7% を占め、福島県(6.2%)を大きく上回る。

農産物販売金額別経営体数(図表 1-5)によると、販売なし・50 万円未満層合わせて福島県では 44.4% を占めているのに対して湯川村は 15.9% となっており、中小零細規模の農家の割合が相対的に低いことがわかる。

また、100 万円～500 万の金額層は福島県が 28.6% なのに対して、湯川村は 55.8% となっていて、村の経営体の半数を占めている。販売目的で作付け(栽培)した作物の類別作付経営体数(図表 1-6)によると、「稲」を作付しているのは 335 経営体にのぼる一方、稲以外の作物でもっとも作付されているのが「野菜類」の 102 経営体である。また平成 26 年水稻市町村別収穫量<sup>1</sup>によると、一反あたりの収穫量は 621kg となっており、福島県内で最も多

<sup>1</sup> 東北農政局 平成 26 年産水稻の市町村別収穫量(福島)

い。以上のことから湯川村は福島県内でも有数の米どころであり、湯川村にとって農業が産業の柱となっていることがわかる。

また、湯川村では、「頑張る若者応援！新規就農者支援事業」に2010年度より取り組んでおり、新規就農者に月10万円を3年間助成するなどの支援策を展開することで、農業の担い手確保を目指している（図表1-7）。

図表1-4経営耕地面積別農家数

	計	0.3ha未満	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～1.5	1.5～2.0	2.0～3.0	3.0～5.0	5.0～10.0	10.0～	1経営体当たり経営耕地面積 (ha)
湯川村 (経営体) (%)	344	1 0.3%	15 4.4%	37 10.8%	54 15.7%	42 12.2%	79 23.0%	69 20.1%	34 9.9%	13 3.8%	3.23
福島県 (経営体) (%)	52,760	333 0.6%	7,406 14.0%	15,319 29.0%	9,384 17.8%	6,141 11.6%	6,591 12.5%	4,322 8.2%	2,318 4.4%	946 1.8%	2.73

2015年農林業センサス

図表 1-5 農産物販売金額別経営体数

単位：経営体

	計	販売なし	50万円未満	50～100	100～200	200～300	300～500	500～700	700～1,000	1,000～
湯川村 (戸) (%)	344 100%	14 4.1%	37 10.8%	46 13.4%	84 24.4%	52 15.1%	56 16.3%	26 7.6%	12 3.5%	17 4.9%
福島県 (戸) (%)	53,157 100%	6,383 12.0%	17,226 32.4%	8,763 16.5%	7,733 14.5%	3,946 7.4%	3,588 6.7%	1,837 3.5%	1,620 3.0%	2,061 3.9%

2015年農林業センサス

<http://www.maff.go.jp/tohoku/press/toukei/seiryu/pdf/141218-06.pdf#search='%E6%B0%B4%E7%A8%B2%E5%B8%82%E7%94%BA%E6%9D%91%E5%88%A5%E5%8F%8E%E7%A9%AB%E9%87%8F%E7%A6%8F%E5%B3%B6'>

図表 1-6 販売目的で作付け（栽培）した作物の類別作付（栽培）経営体数 単位：経営体

	作付 （栽培）実 経営 体数	類別作付（栽培）経営体数								
		稲	麦 類	雑 穀	い も 類	豆 類	工芸 農作 物	野菜 類	花卉類 ・花木	その他の 作物
湯川村	340	335	1	16	41	27	1	102	6	8

2015年農林業センサス

図表 1-7 若者移住就農支援事業

◆助成の対象

- (1) 本村に住所を有し、かつ居住している者
- (2) 申請時40歳未満であって、農業を生計の中心として位置づけ、自己努力と自立経営の意欲をもって年間150日以上農業に専従する者
- (3) 県知事より就農計画の認定を受けた者
- (4) 就農後5年以内に認定農業者になる意志がある者

◆助成の金額と期間

補助額は、月10万円とし、補助期間は、補助を決定した月から36月（3年間）を限度とする。

◆途中で農業をやめた場合

以下の事由が発生した場合は、補助の交付を停止し、これまで交付した補助を返還。

- (1) 農業以外の職に就業したとき。
- (2) 村税等を滞納したとき。
- (3) その他不正な行為があると認められたとき。

【返還額】

- (1) 就農してから3年以内に離農した場合は全額
- (2) 就農してから3年以上5年以内に離農した場合は2分の1の額



※死亡、疾病又はその他やむを得ない事由により補助を返還することが困難と認められる場合は返還を免除することができる。

(湯川村ホームページより)

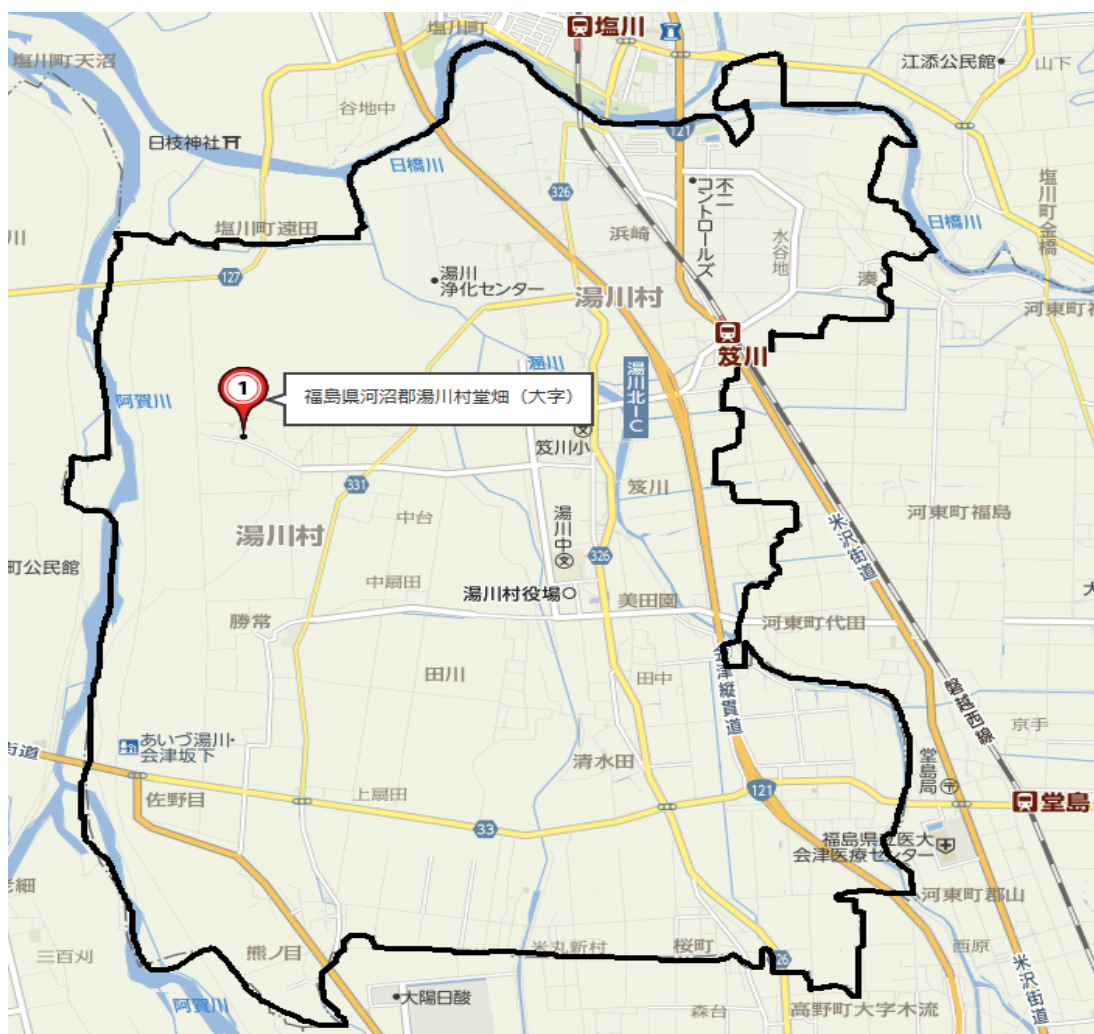
## 第2章 堂畑地区の概況

### 第1節 概況

#### 1. 堂畑地区の位置

下の「図表 2-1-1 湯川村地図」を見て分かるように、堂畑地区は村の北西に位置しており北は喜多方市、阿賀川をはさんで西は会津坂下町との境界を接する地区である。田畑で囲まれた集落からは磐梯山、飯豊山を望むことができ、夏には蛍を見ることができるとなど自然の豊かな地区である。

図表 2-1-1 湯川村地図 引用：yahoo 地図





## 2. 人口

堂畑地区の人口は2016（平成28）年3月現在213人で、男性103人、女性110人となっており湯川村の32ある行政区の中では4番目の規模になる。高齢化率は25.4%で世帯数は49世帯である。また、全47戸中34戸が農家であり多くの住民が農業に何らかの形で携わっている。私たちが実施し、79人から回答をいただいたアンケート調査(回答率37%)では、「3世帯同居」が28人(35.9%)、「2世帯同居」が33人(42.3%)、「夫婦のみ」が5人(6.4%)、「ひとり暮らし」が1人(1.3%)でその他(4世帯など)が11人(14.1%)、「兄弟姉妹と同居」は0人だった。

図表 2-1-2 堂畑地区の人口（湯川村役場資料より） (人)

	計	0~14歳まで	15~64歳まで	65歳以上
男性	103	16	63	24
女性	110	10	70	30
全体	213	26	133	54

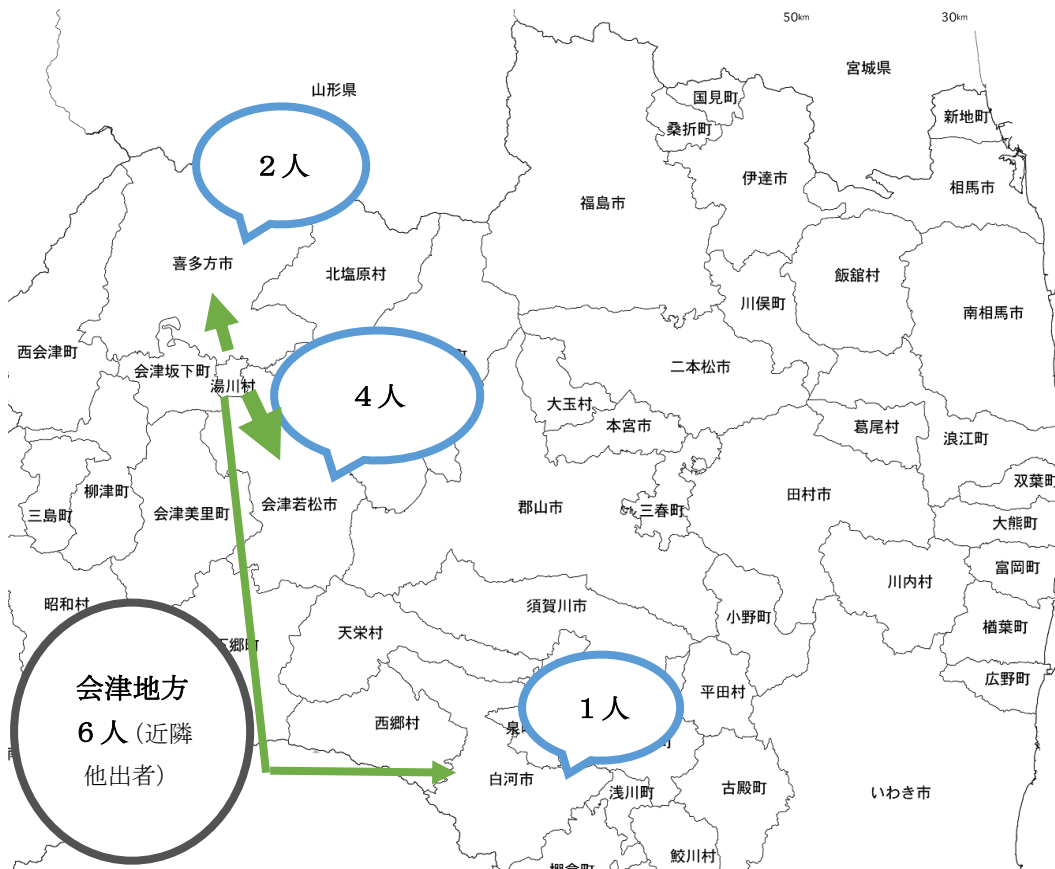
なお後継者層の同居/他出の状況についてまとめたのが下の「図表 2-1-3 後継者層の同居/他出の状況まとめ」である。同居/他出している後継者層の数は70人おり、同居が50人(男：20人 女：30人)、他出が20人(男：11人 女：9人)という結果となった。なお後継者層とは調査でお話を伺った回答者本人の息子娘世代(息子の妻や娘の夫も含む)とする。

他出先としては、男性の場合、会津若松、白河、日立、仙台、埼玉、東京となり、女性の他出先としては、喜多方、会津若松、新潟、栃木、東京、鹿児島という結果となった。県内の会津地方の市町村を近隣とし、それ以外を遠隔地とすると他出先の比率は男女合わせて近隣6人(30.0%)、遠隔地14人(70.0%)となり湯川村から距離のある地域への他出が多いということが分かった。

図表 2-1-3 後継者層の同居/他出の状況まとめ（2016年9月聞き取り調査より集計）

	男性	女性	人数計
後継者層の人数計	31人(44.2%)	39人(55.7%)	70人(100%)
うち他出者	11人(15.7%)	9人(12.8%)	20人(28.5%)
主な他出先	会津若松市3人 白河市1人 日立市1人 仙台市1人 埼玉県2人 東京都3人	会津若松市1人 喜多方市2人 新潟県1人 栃木県1人 東京都3人 鹿児島県1人	

図表 2-1-4 堂畑地区後継者層の県内における他出先



### 3. 地区内の団体・活動

予備調査時に地区からいただいた資料によると堂畑地区には以下のような組織、団体がある。

- 区役員（区の運営に携わる。5人）
- 青年団（20~30歳代が参加、これまで担当していた神楽は人数不足により平成28年度より休止。現在1~2人のみ）
- 婦人会（60~70歳代が参加、公民館清掃などで活動。10人程）
- 老人会（介護予防運動：にこにこ学級、公民館周辺の花植えなどで活動。）
- 環境保全活動（清掃や地区内の花の手入れなど。多面的機能支払制度を活用し、平成28年度より作業に賃金が支払われるようになる）



【2016年11月11日の収穫祭の際に参加させていただいたにこにこ学級】

#### 4. 共同作業・行事

2016（平成28）年度に堂畑地区で行われた事業は以下の「図2-1-5 堂畑地区 平成28年度事業計画」のとおりである。地区の共同作業に関しては、原則として1軒につき1人、主に男性が参加。聞き取り調査では出る出ない様々な声が聞かれたが出不足金が出る時もある。地区の集まりはよく、参加は地区に住む限り当たり前のことであり、負担とは思わないという方が多かった。

一方で、「力仕事が多く女性が参加するのは体力的に厳しい」、「今は大丈夫だが、歳をとってからが心配」、「農業に従事していない若者にとっては負担になっていると感じている。」などといった将来に対する懸念の声も聞かれた。私たちが事前調査で訪れた際に、区役員の方々から伺った地区の課題でも地区行事への参加者の減少が挙げられており、参加することは当然と考えながらも今後の共同作業の継続、維持に不安を感じている住民もいる。

図 2-1-5 堂畑地区 平成 28 年度事業計画

堂畑地区 平成 28 年度事業計画	
1.	大般若経奉転読
2.	夜警
3.	春と秋の一斉清掃
4.	農道普請
5.	村内一斉清掃・道路愛護及び道路ふれあい月間県道清掃
6.	アメシロ防除 <sup>2</sup>
7.	集会所の雪囲い・防雪柵の取り付け及び取り外し
8.	義務人足
9.	古峰神社及び柳津代参 ※1
10.	柳津講中 ※1
11.	堤下一斉大江払い及び大排水江払い
12.	村民バレーボール大会（村主催）（2月）
13.	集落スポーツ大会（5月）
14.	壮年ソフトボール大会（村主催）（6月）
15.	研修旅行
16.	村民ソフトボール大会（村主催）（8月）
17.	村民運動会（村主催）（9月4日午前）
18.	子供樽神輿及びイベント（9月4日午後） ～青年団が運営。子供神輿が集落内を歩く。夕方はバーベキューで
19.	歳の神（1月） ※2

（事前調査時配布された資料「堂畑地区平成 28 年度事業計画」より）

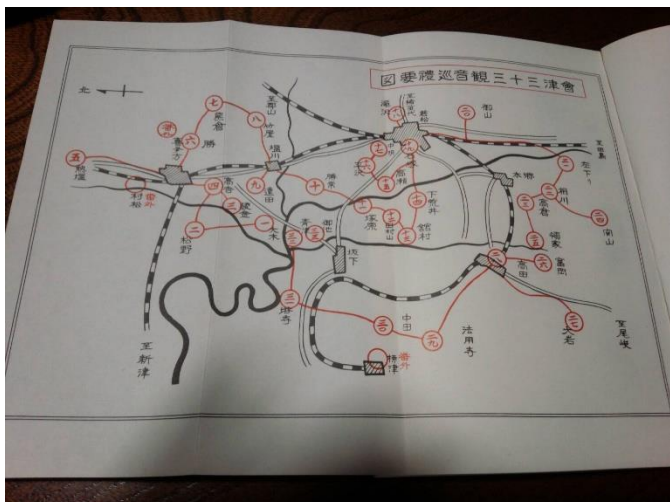
地区の共同作業は上記の活動のほかに聞き取りによれば「細かいのも含めると年間百件以上もある」と答えた住民もいた。また、農家ではなく平日働いているのに住民の多くが農家のため農業関係の共同作業が多く、休日に作業があったりすることに不満を持っていたり農業関係の作業はどうしても身体を使うので負担と感じている人もいる。

一方で、年に数回の行事で地区の人同士で行く旅行を楽しみにしている人が多い。「共同作業はみんなと話すことができる機会になる」という声もあり、地区のつながりの強さを感じることができるとともに共同作業が地区の住民をつなげる役割を果たしているということが分かった。

また地区全体ではないが一部の住民の共同の活動として、堂畑地区と勝常地区の間にある「御月宮」と呼ばれる祠の氏子がある。氏子になっている住民は祠の管理をし、毎年 9 月の夜には氏子で集まり、お酒を飲み交わしているという。

<sup>2</sup> 「アメリカシロヒトリ」という毛虫の駆除のこと

※1 ・古峰神社、柳津代参、柳津講中：複数の構成員で講と呼ばれる集団を作り、神社へ参拝し五穀豊穰や集落の人々や家族の無病息災を願うこと。会津地方では会津三十三観音を巡る観音講<sup>3</sup>も各地で行われている。



【聞き取り調査の訪問時に見せていただいた会津三十三観音巡礼図】

※2 ・歳の神：1月15日ごろに行われる。田んぼや畑に木を組み合わせ、わらやしめ縄、古いお札などを燃やす。この火で焼いたもちやすめを食べると脳病みしないといわれる。



【参考写真】以下 URL より引用

<https://aizumonogatari.com/event/5420.html>

---

<sup>3</sup> 「江戸初期、会津領内でも伊勢参りや西国三十三札所巡りが流行っていた。会津の領主となった保科正之公が、遠路を行けない人のために寛永年間に勧請したとされている。古来より会津は仏都として栄えており、特定の寺院の力を削ぐ目的もあったようである。信仰とともに農閑期の娯楽でもあり、特に女性たちの楽しみとして発展し「観音講」として親しまれていた。」以上「会津への夢街道」より

<http://www.aizue.net/jyunrei/aizu33kannon.html>

## 第2節 農業経営について

### 1. はじめに

私たちは9月3. 4. 5日の3日にかけて、湯川村堂畑地区の30件を対象に聞き取り調査を行った。以下はその際に伺った農業経営の状況に基づいてまとめたものである。

### 2. 現在の経営耕地等

下図表 2-2-1 において、水田、普通畑に関しては調査対象のほとんどのお宅で所有していたが、一方で果樹地は少しだけ持っているお宅が2件であった。また、米の村ということもあり、水田の平均面積が200aを超えているため、お宅ごとに多少の差はあるが、米を農作業の軸にしていることが分かった。

図表 2-2-1 経営耕地の所有件数と面積

	耕地所有件数	平均面積	最大面積	最小面積 (0a は含めない)
水田	29/30 件	205. 48a	400a	40a
普通畑	28/30 件	44. 58a	170a	0. 3a
果樹地	2/30 件	不明	不明	不明

### 3. 農作業受委託について

今回の聞き取り調査を実施した30件のうち農作業に従事しているお宅は26件で、そのうち、何等かの農作業を委託しているのが10件、受託している農家は1件だった。

農作業を委託するようになった経緯としては、「病気になり、以前のように思い通りに身体がうまく動かなくなってしまった」「農作業をしていた人が亡くなり、誰もやらなくなったから」などが挙げられた。委託している相手方は集落内外の人々や親戚、シルバー人材、農協などに頼んでいる。作業内容としては育苗、田植えや収穫などコンバインなどの機械を必要とする農作業を委託している傾向にある。

また、農作業受託するようになった経緯としては、「現在村内の方2名に頼まれて、作業の受託を行っている。機械があるので今後も続けていくつもりである」という意見が挙げられた。

#### 4. 借入・貸付地について

今回、聞き取り調査を実施した 30 件の中で農地の貸し付けをしているお宅は 10 件であり、農地を借りているお宅は 6 件であった。

農地を貸し付けするようになった経緯は「仕事と両立できないため」「自宅で消費するくらいは量しか作らないから」「身体が続かない」などの理由があり、借入では「農業を大きくやってみたいから」「相手ができないため」などの理由が挙げられた。また、借入・貸付はほとんどが地区内や村内の方に行っているお宅が多い。今後も、継続して借入・貸付を行っていきたいという方が多かった一方で、「退職したら農業に復帰するため、それまでは貸し付けする」という方や、「やれるところまではやる」という前向きな考えを持っている方もいた。

#### 5. 雇用労働について

農作業に従事している 26 件のお宅の中で、人を雇って農作業を行っている件数は 1 件であった。その方は田植や追肥で人を雇っている。その方は水田を 330a 所有しており、その半分は借入面積となっており、大きく農業を行っている。1 年を通して人を雇っているわけではなく、忙しい時期にのみ雇っている。他にも今度雇う予定のお宅は 1 件あり、その方も、大きく農業を行っているため、田植えや種まきで雇う予定である。

#### 6. 所有している農業機械について

図表 2-2-3 農業機械の所有件数

調査対象のお宅のうち、28 件のお宅で農作業機械を持っていた。機械別の所有件数は右図表 2-2-3 の通りである。トラクター、田植機、コンバインの 3 つを持っているお宅が 18 件あった。今後の機械の更新については、半数ほどは「更新する」「壊れた場合は購入する」という意見であった。残りは「未定」、あるいは「更新しない」という答えであった。一方、機械（コンバインや種まき機）を共同で使用している世帯も確認できただけで 4 件あり、今後も更新という意見があった。

農業機械の種類	所有件数
トラクター	31
田植機	21
コンバイン	16
乾燥機	4
もみすり機	2
耕運機	4
種まき機	2
除雪機	1

#### 7. 収穫される農作物について

図表 2-1-4 は、聞き取り調査により把握できた、湯川村堂畑地区で栽培されている農作物の種類と加工品(販売用・自家用問わず)をまとめたものである。5 件以上で栽培されている農作物や製造されている加工品に◎、5 件未満には○として記入した。この図表に記されている農作物以外にも様々な種類の農作物が湯川村堂畑地区では栽培されている。春夏秋冬

で様々な農作物を栽培しており、基本的に 1 年間を通して農作業に従事している家庭が多いということがわかった。

作られた農産物は、自家用で消費するまたは親戚やご近所にお裾分けをするという家庭が多かったが、「米」に関しては農協に出荷しているという農家のほか、直売所や直接顧客に販売している農家もあることがわかった。

図表 2-2-4 湯川村堂畑地区「食資源調査」

1. 葉菜類

品名	数	備考	
白菜	◎	13 件のお宅で栽培	
春菊	○		
小松菜	○		
長ネギ	◎		
ちんげん菜	○		
ブロッコリー	○		
アスパラガス	○		
モロヘイヤ	○		
キャベツ	◎		13 件のお宅で栽培
玉ねぎ	◎		13 件のお宅で栽培
レタス	◎		
ほうれん草	◎		
カリフラワー	◎		
じゅうねん	○		

2. 根菜類

品目	数	備考	
大根	◎	15 件のお宅で栽培	
さつまいも	◎		
里芋	◎		
人参	◎		
カブ	○		
ニンニク	○		
長いも	○		
ジャガイモ	◎		19 件のお宅で栽培
ばれいしょ	○		
ごぼう	○		



### 3. 果菜類

品名	数	備考
ナス	◎	16 件のお宅で栽培
ピーマン	○	
トマト	◎	18 件のお宅で栽培
ミニトマト	○	
枝豆	◎	14 件のお宅で栽培
大豆	○	
納豆豆	○	
カボチャ	◎	23 件のお宅で栽培
サヤインゲン	○	
オクラ	○	
キュウリ	◎	
落花生	○	
トウモロコシ	◎	
ゴーヤ	○	
サヤエンドウ	○	
ズッキーニ	○	

### 4. 米

品名	数	備考
米	◎	コシヒカリ
米	◎	ひとめぼれ
米	○	チヨニシキ
米	○	天のつぶ

### 5. 果実類

品名	数	備考
スイカ	○	
メロン	○	
柿	○	
イチゴ	○	

## 6. 加工品

品名	数	備考
漬物	◎	たくわんなど野菜の漬物
切り干し大根	○	
味噌	◎	
ピーナッツ味噌	○	
梅干し	○	
いちごジャム	○	
トマトジュース	○	
粕漬け	○	
きゅうりの佃煮	○	
納豆	○	
うち豆	○	大豆をつぶして乾燥させた加工食
らっきょう	○	
乾燥ニンニク	○	
干しもち	○	

上の図表 2-1-4 より、湯川村堂畑地区では様々な農作物が栽培されていることがわかったが、「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」に出荷しているのは聞き取り対象世帯のうち3件のみであった。しかし、「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」に出荷している方以外にも、家庭で多くの種類の農作物を栽培している方が多い。私たちは、道の駅に出荷している方と出荷予定がない方をピックアップし、耕地所有面積や農農業従事者、さらに栽培している農作物にどのような違いがあるのか比較した。その結果、栽培している農作物の種類に大きな違いはなかった一方で、世帯内の農業従事者の状況に違いがみられた。出荷しているお宅は、夫婦が農業に従事していた。非出荷のお宅は、主に本人が1人で従事しており、時折、家族が手伝っている。また、出荷しているお宅は所有面積以外に農地を借入し、野菜を栽培しているが、非出荷のお宅は農作業委託を行っていた。道の駅への出荷は、農業に従事する労働力やそれに伴った時間的余裕が必要であり、主に1人で農作業を行っていることや、高齢化に伴う体力低下や健康状態への不安が、道の駅への出荷を消極的にさせていると考えられる。

#### 8. 保存食や加工品について

多くのお宅で保存食や加工品が作られていた。最も多かったのは、たくわん等の漬物であり、15件のお宅で作られていた。次いで多かったのは味噌で、8件のお宅が作っていた。その他は、トマトジュースや梅干し、納豆、いちごのジャム、乾燥ニンニクなどが作られていた。また、味噌の中ではピーナッツ味噌を作っているお宅や漬物の中にもたくわんだけでなく、ナスやキュウリなどを含め、多くの加工品や保存食が作られていた（図表 2-1-4 参照）。

#### 9. 遊休農地（耕作放棄地）がある場合の理由について

遊休農地についての質問を実施したところ 15 件のお宅から遊休農地があるとの回答があり、総計で 145～150 アールの遊休農地を確認した。

聞き取り調査において、遊休農地化の現状と理由についての回答が得られ、以下の通りである。

- ・「たくさん作れないから。」
- ・「(水田 2 反) 作ると損が発生するから」
- ・「(普通畑 3 アール) 連作にならないように」
- ・「農業のやり方もわからないし、やる時間もないから」
- ・「場所が悪くて作物を作っても育ちにくいから」
- ・「(20 アール) 遠いから。年に 3 回耕してもらっている」

畑は手間がかかる、やり方がわからないという理由でやむを得ず遊休農地となっている場合が多いようである。畑に作物を植えなくとも、雑草地にならないように手入れをしている方もいるため、その手入れの手間がかかるという問題も発生している。

### 第3章 堂畑地区の住民意識—戸別聞き取り調査から—

この章では2016（平成28）年9月3～5日に実施した、堂畑地区戸別聞き取り調査の結果を通して、堂畑地区の実情や堂畑地区に対する住民の方々の考えなど、明らかになったことをまとめていく。

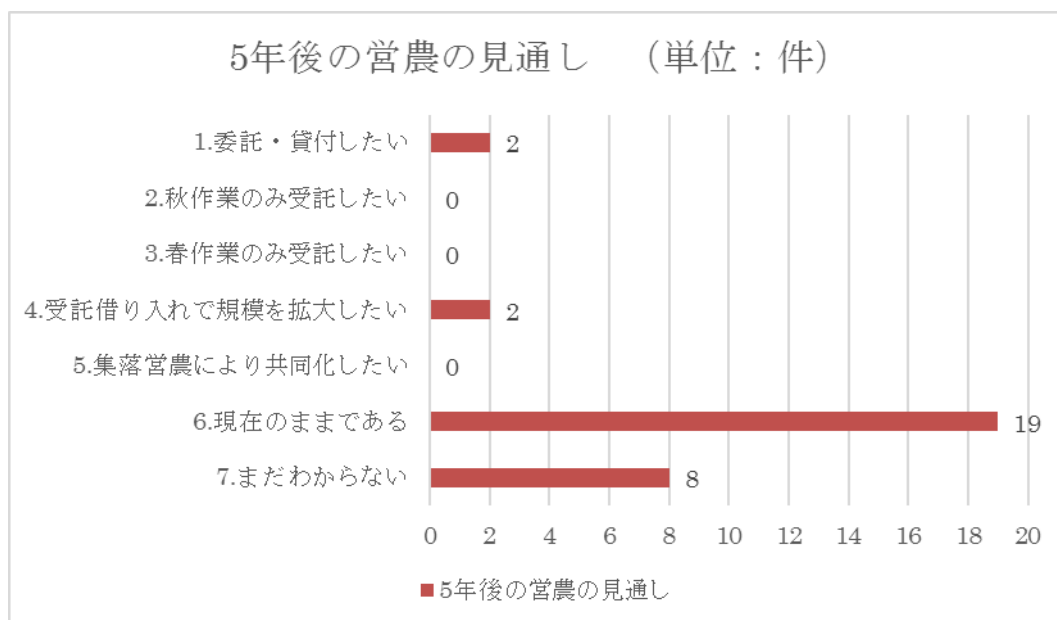
#### 第1節 農業経営・経営農地の承継について

まずは「農業に従事しているか」についてである。専業、兼業趣味などを問わず、農作業を行っている世帯は31世帯中28世帯と非常に多かった。このことから、堂畑地区の主要産業は農業であり、生活の一部となっていることがわかった。

##### 1-1. 5年後の営農の見通しについて

この質問に対しては、「現在のままである」という回答がもっとも多く19件、「受託や借り入れにより規模を拡大したい」という意見が2件、「委託・貸付をしたい」が2件、「まだ分からない」という意見が8件であった。この回答は、高齢の方であってもまだまだ自分が農業をやっていくのだという強い意識を感じるものであったが、一方で今後の見通しが立っておらず、不安を感じている人もいるということがわかった（図表3-1-1）。

図表3-1-1 5年後の営農の見通し



（堂畑地区戸別聞き取り調査より）

## 1-2. 農業をいつまで続けたいか（していない場合は農業への意欲があるかどうか）

現在農業を行っている 29 世帯では、「可能な限り続けたい」という意見が最も多く 26 件で、「続けたいとは思わない」という意見が 2 件だった。

「可能な限り続けたい」と回答した人の多くは、「生きがいだから」、「やりがいがある」などポジティブな理由であった。また、「引き継いだ田んぼを荒らしたくないから」、「自分の家の財産である土地を守るため」など、やらざるを得ないからという理由もあった。一方で、「農業は経済的に厳しい」、「農業機械が壊れたらやめざるを得ない」など、農業を続けたくても続けることが難しいという意見もあった。「続けない」と回答した人の意見としては「農業に魅力がない」、「赤字になる」というものが挙げられた。

農業を行っていない 3 世帯では、「定年をきっかけに始めたい」という意見が 2 件あり、理由としては「ボケ防止のため」、「お金をかけずにお金を得たいから野菜を作りたい」ということだった。「始める予定はない」という意見は 1 件だった。

## 1-3. 後継者が農業従事する見通し（他出の場合は帰村の見通し）

この質問に対しては、「見通しが立っていない」という意見が 29 件、「見通しが立っている」という意見が 2 件だった。

「見通しが立っていない」という意見には、「継いでもらいたい」、「農業をやってももらいたい」という農業に肯定的な意見がある一方で、「ストレスがたまるからやらせたくない」、「成り立たないからやらなくて良い」という農業に否定的な意見もあった。

「見通しが立っている」という意見は「息子がやる予定」というものであった。

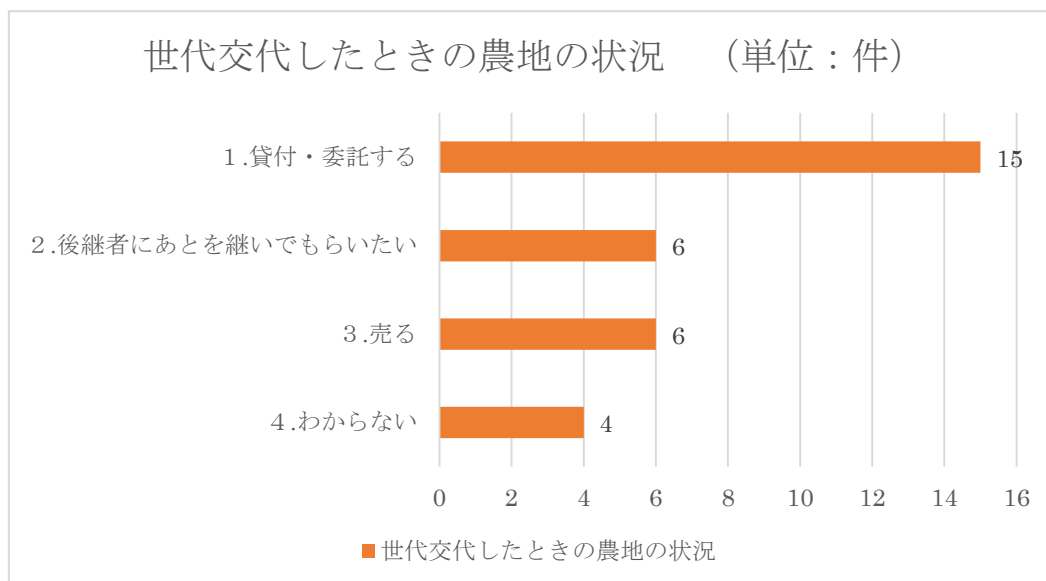
## 1-4. 世代交代した時の農地の状況

この質問に対しては、「貸付・委託する」という意見が 15 件、「継いでもらいたい」という意見が 6 件、「売る」という意見が 5 件、「わからない」という意見が 4 件、「現在のまま」という意見が 1 件であった（図表 3-1-2）。

「貸付・委託する」という意見には、「同じ地区の人や親戚の人をお願いしたい」、「親戚の人をお願いしたい」というように、信頼できる相手に貸付・委託をしたいという意見が多かった。一方で、「どこも後継者不足で貸す相手が見つからない」、「貸す相手はいるがその人も高齢である」などという意見もあり、後継者不足・高齢化が深刻だということが分かった。「継いでもらいたい」という意見には、「希望は継いでもらうこと。無理なら貸付をする」というように、継いでもらいたいが、無理なら他の貸付・委託や売るという方法をとるという意見が多かった。

「売る」という意見には、「後継者がいないので売る選択しかないが、実際に売れるのか現実的に厳しい」「売りたいはないが、孫たちが売ってしまうだろう」というように、代々受け継いできた土地を手放したくはないが、仕方がないという思いが感じられた。そのほかの意見としては、「放っておく」、「先のことは分からない」といった意見が挙げられた。

図表 3-1-2 世代交代した時の農地の状況



(堂畑地区戸別聞き取り調査より)

## 第2節 集落の役割と課題について

### 2-1. 共同作業について

雪がこいの設置や水路掃除、草刈りなどの共同作業は、地区が持続していくために必要不可欠なものである。聞き取り調査によって「地区の共同作業への参加の頻度・理由」について尋ねると、参加の頻度などに違いはあるが、すべての世帯が「参加している」という回答だった。

しかし、その中には参加しているが「負担に感じている」というが4件あった。理由としては、「体力的に疲れる」、「日曜の午前5時からなど、朝が早い」、「細かいものまで入れると年間100以上あり、勤めに出ている人にとっては大変」といった意見だった。また、「負担に感じていない」といった人の中にも、「自分は負担ではないが、若者は負担に感じているのではないか」、「今は大丈夫だが、歳を取ってからが心配。」といった意見があった。

現在は共同作業が維持できているが、「負担に感じ出て行く若者がいる」、「高齢化が進み、参加できない世帯が出てくる」などという将来を不安視する意見もあった。



(堂畑地区の水路)



### 2-2. 堂畑地区の伝統行事やサークル活動

堂畑地区には、秋祭りやバーベキュー大会、

老人会、婦人会など、イベントや行事がたくさんある。その参加状況について伺うと、「参加している」が29件、「参加していない」が2件と、ほとんどの世帯で最低でも1人、行事やイベントに参加しているということが分かった。

また、堂畑地区には伝統的にキョウダイブン（兄弟分）という制度がある。キョウダイブンとは、血縁の兄弟ではないが、約束を結んで兄弟同様の親しい間柄となった人のことである。血縁の関係がなくても生涯を通して助け合う制度が存在し、つながりを大切にしていることがわかった。



(バーベキュー大会)

### 2-3. 堂畑地区の好きなところ、将来まで守ってきたいお宝について

堂畑地区の方たちが考える地域の魅力について伺ったところ、特に意見が多かったのが、「結びつき・人柄の良さ」、「自然・景観」、「伝統芸能」に関するものだった。

「結びつき・人柄の良さ」の意見としては、「小さいころから絆やつながりが強い」、「みんなで集まってお祭りやバーベキューをするなど仲が良い」、「近所の人世話をしてくれる」といった意見が挙げられた。フィールドワークを行った際には、よそ者の私たちに対して親切に接してくださり、野菜や料理をふるまってくくださる方が多かった。

「自然・景観」の意見としては、「お寺の北にある磐梯山と稲穂の景色がきれい」、「これというお宝はないものの、工場や大型施設が建つことなく、この景観が守られればいい」、「自然があって静か」といった意見が挙げられた。土地が平坦で山が少ない、大きな道路や工場がない、田畑が多いといった立地条件がこうした回答に反映されていると考えられる。

「伝統芸能」に関する意見としては、「大般若経。昔あった神楽が復活したらうれしい」、「集落は、伝統的なことを伝承していくところ」、「盆踊りや神楽、獅子舞など」といった意見が挙げられた。

#### 2-4. 堂畑地区の郷土料理について

好きなどころ、将来まで守っていききたいお宝に関連して、堂畑地区の郷土料理についても伺うと、以下のような回答が得られた。

もっとも多く挙げられたのが、結婚式やお葬式、お彼岸などの特別なときに作られるという「こづゆ」だった。また、意外にも「いか人参」、「ニシンの山椒漬け」、「鯨汁」、「銀たらの煮付け」といった魚料理が目立った。他には、「ちまき」、「馬刺し」、「面取り大根」、「松前漬け」、「饅頭の天ぷら」、「大根の煮付け」、「ざくざく」、「草もち」といった料理が挙げられた。郷土料理ではなくても各家庭それぞれの料理法や味付けがあり、代々受け継がれている母の味があるということがわかった。

#### 2-5. 堂畑地区の問題点、今後取り組むべきことについて

堂畑地区の問題点、今後取り組むべきことについて伺ったところ、住民の方々からは幅広い分野から様々な意見が挙がった。特に多かったのは、「交通関係」、「若者・後継者不足」、「農業に関すること」である。

「交通関係」の意見としては、「道路が狭く、車の往来が危険」、「交通の便が悪い」、「近くにお店が無い」、といった意見が挙げられた。会津若松市や喜多方市、会津坂下町が隣接しており、買い物などには困っていないと思っていたが、車が無い人にとっては不便であるということが分かった。また、高齢者は村に申請をすればタクシーの利用券をもらうことができるので問題ないが、子供や障害者の方は特に不便だと感じた。

「若者・後継者不足」の意見としては、「役割の循環ができなくなり、区の運営に支障



をきたすのではないか」、「世代交代の後、行事を継続できるか」、「子供がいない」などの意見があげられた。

「農業関係」の意見としては、「どうやって農産物を販売するか」、「基盤整備のせいで水位が下がり、米に悪影響が出た」、「道の駅への出荷が少ない」などの意見が挙げられた。

その他には以下のような意見が挙げられた。

- ・「面倒見が良い反面、噂話が好きで、他人の事情に突っ込みすぎる」
- ・「高齢者（75歳以上）が行事やイベントになかなか参加してくれない」
- ・「気安く役員に意見をいづらい」
- ・「空き家が増え、獣害や火災の恐れがある」
- ・「空き家に移住する住民は集まりに参加せず、地区の会費を払わない傾向がある」
- ・「人数の減少に伴い、地区の活動自体が難しくなっている」

### 第3節 今後の地域活性化について

#### 3-1. Iターン者への期待について

堂畑地区の人々がIターン者についてどのように考えているか聞き取り調査した結果、すべて「来て欲しい」という回答だった。具体的には「イベントなどで積極的に交流したい」、「歓迎するし、不満は無い」といった意見が挙げられた。しかし、その中には、「来て欲しいが不安もある」という意見があった。具体的には以下のようなものが挙げられた。

- ・「不安だから役所から住民に移住者の情報を伝えて欲しい」
- ・「素性がわからない人が来るのは不安」

#### 3-2. 空き家の利活用について

住民の方々が空き家の利活用についてどう考えているか伺うと、「更地にして障害者施設を作る」、「若者が好きに使える場所があっても良いと思う」、「きれいにしてみんなで使える場所にしたい。新しい人が来ても良いと思う」といった空き家の利活用に前向きな意見が挙げられた。しかし、「リフォームにお金と手間がかかる」、「壊すにしてもお金がかかる」といった金銭的に難しいのではないかと不安視する意見もあった。

#### 3-3. 道の駅への出荷の有無（品目や変化、理由も含む）

道の駅への出荷有無について調査した結果、農業を行っている29世帯のうち、「出荷していない」が26件、「出荷している」が3件という結果だった。

「出荷していない」理由としては、「出荷するほどの量が無い。自分たちで食べる分だけあればいい」、「出荷するためには品質を良くしなければならない」、「高齢のため、作るのも、持っていくのも大変」といった意見が挙げられた。

また、道の駅に出荷している人に、道の駅に出荷する長所と短所についてうかがった。長所については以下のとおりである。

- ・「調理の仕方を書いた紙を野菜の袋に入れるなどの工夫をすると、お客さんに喜んでもらえる」
- ・「忙しい時期には出荷しないなど融通が利く。」
- ・「値段を自分で決められる。」
- ・「時給として換算すると安いのが、よいものを出したいという意欲がわく。」
- ・「野菜に愛着がわいた。」
- ・「いろんな人とコミュニケーションが取れ、情報交換ができる。」

また、道の駅の出荷に関する短所については以下のようにおっしゃっていた。

- ・「出荷したあと三日たてば、回収しなくてはならない。」
- ・「高齢化で気力体力が続かない。」
- ・「加工品になると、保健所などの審査が大変。」
- ・「天候が悪いと売れ行きが悪い。」

#### 3-4. 今後の地域活性化についての意見

今後の地域活性化の意見としては主に「行政への意見」、「道の駅への意見」、「若者への意見」、「私たちへの意見」の4つが挙げられた。

行政への意見としては、「雇用を増やす必要がある」、「国宝があるため、その活用をしてほしい」、「若い人が自分で生活できる社会を湯川村でできるのか。行政がしっかりとサポート」、「働き口があれば人がくると思う」といった意見が挙げられた。

道の駅への意見としては、「道の駅でどんなイベントをしているのかわからない」、「道の駅は妥当な値段で売っていると思う。近いから、道の駅には頻繁に行くと思う」といった意見が挙げられた。

若者への意見としては、「若い人が興味を持っていくことが大事」、「何かを変えていくにはもっと若い人たちに積極的になってほしい」、「イベントに若者が来ることが大切。張り合いや賑わいが重要」といった意見が挙げられた。

私たちへの意見としては、「新鮮な目で客観的に見てほしい」、「よその事例や取り組みの紹介や導入を行っていくべき。よそ者の視点から足りないものを発見してほしい。少子高齢化対策の紹介などをしてほしい」、「福大生の発表で意見を聞きたい。10~15年後にもう一度来て、見てほしい。売り方のアドバイスをしてほしい。（おいしいものを作ることはできる）」といった意見が挙げられた。

その他の意見としては「勤め終わって年金をもらうようになったら地域貢献をしたいと思うようになった」、「今までの行事をさらに充実したものにしたい。この地区の良い点

を他地区でも反映していけたらいい」、「いろんな世代の人とかかわりたい。若い人がいるのは活気があって良い」といった意見が挙げられた。

## 第4節 まとめ・考察

この第4節では、第1節から第3節それぞれについてまとめ・考察を行う。

### 4-1. 第1節について

第1節では、農業経営・経営農地の承継についての調査結果をまとめた。堂畑地区は農業を行っている世帯が多いが、少子高齢化の影響や、若者の都会への流出によって、後継者が不足し、将来の農地経営に不安を抱えている世帯が多いという問題があることが分かった。土地が平坦で農作業がしやすい、住民同士の仲が良く、農業に関する情報の共有がしやすいといったメリットを情報発信するなど、新規就農者を増やす取り組み必要がある。

### 4-2. 第2節について

第2節では、地区の役割と課題についての調査結果をまとめた。伝統行事やイベントについては多くの人が意欲的に参加している一方で、共同作業については負担に感じている人もいた。また、若い人が減っている影響で行事や共同作業の頻度や規模が縮小していた。後継者に地区に残ってもらい、若者に移住してもらうことができればよいが、すぐに実現するのは難しい。後継者・若者を増やす方法を検討するのと平行して、現在住んでいる人々の中で、負担ができるだけ少なくなるような役割分担を考える必要がある。

### 4-3. 第3節について

空き家については利活用を進めるのであれば、堂畑地区内や行政との話し合いの場を設け、具体的な活用案や先進事例などを検討し、堂畑地区に合った活用方法を考えていくことが必要ではないかと感じた。

また、堂畑地区は移住者がそれほど多くは無く、住民同士の結びつきが強いので、よそ者が来ることに抵抗があるのは仕方が無いことだと考えられる。すぐに仲を深めるというのは難しくても、たくさんある行事や地区の共同作業などを通して仲を深めていけるのではないだろうか。

また、道の駅については、農協などに出荷するのと違い、自分で値段を決めることができるという点が大きかった。売り上げによって、どの野菜の人気があるのを把握することができ、今後の農業に活かすことができる。また、直接消費者が商品を購入するので、

売れたときの喜びが大きく、農業に対するモチベーションの向上にもつながると考えられる。

## 第4章 堂畑地区住民アンケートの結果と考察

### 第1節 住民アンケート調査の概要

私たちは、堂畑地区での日常の暮らしや農業、集落の活性化についての考えを伺うアンケート調査を行った。各世帯を訪問した際に、高校生以上の家族員数分のアンケート票をお渡しし、郵送で回収を行った。結果として、79名（男性37名、女性42名）の方から回答を得ることができた（調査票は付属資料として後掲した）。

#### アンケート調査項目概要

- (1) 堂畑地区で生活している方に関する質問（問1～4）  
（質問内容：性別、年齢、職業、家族構成）
- (2) 地区内での農業に関する質問（問5～6）  
（質問内容：農作業従事、今後の農業について）
- (3) 地区での現在の生活に関する質問（問7～11）  
（質問内容：交通手段、交流の度合い、地区の好きなおところ、満足度、足りない・必要と思うもの）
- (4) 今後の地区での生活に関する質問（問12～15）  
（質問内容：暮らしへの不安、地区に住み続けたいか、移転理由、帰村の意思の有無）
- (5) 地区の活性化に関する質問（問16～17）  
（質問内容：地区活性化のために行うべきこと、どんな地区になればよいか）
- (6) 道の駅に関する質問（問18～19）  
（質問内容：道の駅にかかわる活動の有無、盛り上げるため必要な活動）
- (7) 地区内の移住者に関する質問（問20～22）  
（質問内容：空き家を活用した移住者の受け入れ、移住者に期待すること、移住者との関わり）

## 第2節 住民アンケート調査結果

(1) 回答のプロフィール（質問内容：性別、年齢、職業、家族構成）  
（問1～4）

### 問1 性別（択一回答）

男性が46.8%、女性が53.2%で、ほぼ半々の結果となった。

図表 1-1

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	男	37	46.8
2	女	42	53.2
	不明	0	0.0
	計(%ベース)	79	100

### 問2 年齢（択一回答）

60～69歳の回答が25件（全体の31.6%）と最も多かった。

図表 1-2

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	19歳以下	4	5.1
2	20～29歳	3	3.8
3	30～39歳	12	15.2
4	40～49歳	12	15.2
5	50～59歳	7	8.9
6	60～69歳	25	31.6
7	70～79歳	7	8.9
8	80～89歳	9	11.4
9	90歳以上	0	0.0
	不明	0	0.0
	計(%ベース)	79	100

### 問3 職業（択一回答）

「職業」については、「農業」の回答が 28 件（全体の 35.4%）で最も多く、次いで「会社員」の回答が 21 件（全体の 26.6%）であった。

図表 1-3

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	農業	28	35.4
2	会社員	21	26.6
3	公務員	5	6.3
4	自営業	1	1.3
5	パート	7	8.9
6	専業主婦	5	6.3
7	無職	6	7.6
8	生徒・学生	4	5.1
9	その他	2	2.5
	不明	0	0.0
	計（%ベース）	79	100

### 問4 家族構成（択一回答）

「家族構成」について、「二世帯同居（親と子ども）」が 33 件（全体の 41.8%）で最多であり、次いで「三世帯同居（親と子どもと孫）」が 28 件（全体の 35.4%）であった。

図表 1-4

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	ひとり暮らし	1	1.3
2	夫婦のみ	5	6.3
3	二世帯同居（親と子ども）	33	41.8
4	三世帯同居（親と子どもと孫）	28	35.4
5	兄弟姉妹と同居	0	0.0
6	その他	11	13.9
	不明	1	1.3
	計（%ベース）	79	100

## (2) 地区内での農業に関する質問（問 5～6）

### 問5 農作業従事について（択一回答）

「農作業従事について」の質問では、「全く関わっていない」が 24 件（全体の 30.4%）で最多であった。次いで「主な収入源として農業を行っている」が 18 件（全体の 22.8%）、「家の仕事として」が 16 件（全体の 20.3%）であった。

図表 1-5

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	主な収入源として農業を行っている	18	22.8
2	補助的な収入源として	6	7.6
3	趣味や楽しみとして	8	10.1
4	家の仕事として	16	20.3
5	その他	5	6.3
6	全く関わっていない	24	30.4
	不明	2	2.5
	計 (%ベース)	79	100

問6 今後農業に関わりたいか (問5で6に回答した方のみ)

問5で農業に「全く関わっていない」に回答した24件のうち、「今後農業に関わりたいか」についての質問に対しては、「今後も関わらない」が18件と最多であった。その理由としては、「ゆとりがない」、「高齢になるため」、「農業は好きではない」、「興味がない」、「購入するほうがよいから」、「仕事の都合」、大変そうだから」といった自由記述意見が寄せられた。

図表 1-6

No.	カテゴリ	件数
1	主な収入源として農業を行いたい	0
2	補助的な収入源として	1
3	趣味や楽しみとして	4
4	家の仕事として	0
5	農地はないが、興味はある	1
6	今後も関わらない	18
	計 (%ベース)	24

(3) 地区での現在の生活に関する質問 (問7~11)

(質問内容：交通手段、交流の度合い、地区の好きなところ、満足度、足りない・必要と思うもの)

問7 ふだん最も多く利用する交通手段 (択一回答)

「ふだん最も多く利用する交通手段」に関する質問について、「自家用車を自分で運転」が60件 (全体の75.9%) と最多であった。

図表 1-7

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	自家用車を自分で運転	60	75.9
2	自転車	2	2.5
3	バス	0	0.0
4	電車	2	2.5
5	家族・知人の車に乗せてもらう	6	7.6
6	その他	3	3.8
	不明	6	7.6
	計 (%ベース)	79	100



問8 ご近所との交流の度合い、頻度（択一回答）

「ご近所との交流の度合い、頻度」に関する質問について、「日常会話をする程度」が 23 件（全体の 29.1%）で最多であった。次いで「よく行き来し、親しく付き合っている」が 20 件（全体の 25.3%）、「挨拶する程度」が 15 件（全体の 19.0%）、「困ったときなど助け合いをする」が 12 件（全体の 15.2%）であった。

図表 1-8

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	よく行き来し、親しく付き合っている	20	25.3
2	困ったときなど助け合いをする	12	15.2
3	日常会話をする程度	23	29.1
4	挨拶する程度	15	19.0
5	付き合いはほとんどない	4	5.1
	不明	5	6.3
	計（%ベース）	79	100

問9 堂畑地区の好きなところ（3つまで回答）

「堂畑地区の好きなところ」に関する質問について、「住み慣れていて暮らしやすい」が 46 件（全体の 58.2%）で最多であった。次いで「自然・景観」が 33 件（全体の 41.8%）であった。

図表 1-9

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	自然・景観	33	41.8
2	人が親切	19	24.1
3	治安がよい	18	22.8
4	歴史・文化	2	2.5
5	住み慣れていて暮らしやすい	46	58.2
6	集落の雰囲気がよい	13	16.5
7	農業が盛ん	8	10.1
8	食べ物がおいしい	19	24.1
9	その他	1	1.3
10	好きなところは特はない	5	6.3
	不明	6	7.6
	計（%ベース）	79	100

特に好きなところとして自由記入があったのは以下のとおりである。

- ・「野菜や米がおいしい」
- ・「好きな野菜を家族に作ってもらえる」
- ・「年に一回行われるイベント」
- ・「土手からの景色がきれい」
- ・「美しい田園風景」
- ・「チームワーク」
- ・「何かあったら誰かが必ず来てくれる」
- ・「事件や事故がほとんどない、安全な集落で安心して住める」

- ・「会津のほぼ中心で若松、喜多方、坂下に近くて便利とまではいかないがまあまあの環境」
- ・「誰でもすぐ声をかけることができるコミュニティがある」
- ・「会津地方の真ん中に位置し、雪も少なく、台風等の災害も心配なく、とても自然の美しいところ」

#### 問10 堂畑地区での暮らしへの満足度（択一回答）

「堂畑地区での暮らしへの満足度」に関する質問について、「ほぼ満足」が 49 件（全体の 62.0%）で最多であった。次いで「どちらともいえない」が 14 件（17.7%）であった。

図表 1-10

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	かなり満足	6	7.6
2	ほぼ満足	49	62.0
3	どちらともいえない	14	17.7
4	やや不満	5	6.3
5	かなり不満	0	0.0
	不明	5	6.3
	計（%ベース）	79	100

#### 問11 堂畑地区に足りないもの、必要と思うもの（3つまで回答）

「堂畑地区に足りないもの、必要と思うもの」に関する質問については、「買い物する場所」が 40 件（全体の 50.6%）で最多であった。次いで「公共交通機関」が 33 件（全体の 41.8%）、「若者の力」が 27 件（全体の 34.2%）、「集落の活気」が 11 件（全体の 13.9%）であった。

その他の回答としては以下の通りである。

- ・「お互いに親身になり声を聴くことがうすれている」
- ・「勝常地区へ抜ける主要道路をもう一本(冬期間に特に必要)、早朝の常識的配慮(ヘリコプターによる薬剤散布、早朝訪問など)、冬期間の除雪の外部委託(地区内の主要道路)、様々な職業の人が住んでいるという認識(農業だけではない)」

図表 1-11

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	公共交通機関	33	41.8
2	働く場所	16	20.3
3	買い物する場所	40	50.6
4	余暇・娯楽(レジャー)施設	8	10.1
5	医療・保健施設	8	10.1
6	子どもの教育環境	4	5.1
7	高齢者の福祉施設やサービス	0	0.0
8	集落の活気	11	13.9
9	若者の力	27	34.2
10	住民の話し合いや交流の場	7	8.9
11	その他	3	3.8
12	特になし	8	10.1
	不明	7	8.9
	計(%ベース)	79	100

(4) 今後の地区での生活に関する質問 (問 12~15)

(質問内容：暮らしへの不安、地区に住み続けたいか、移転理由、帰村の意思の有無)

問12 将来堂畑地区での暮らしで不安なこと (3つまで回答)

「将来堂畑地区での暮らしで不安なこと」に関する質問について、「高齢者だけの世帯が増えている」と「子どもの数が減っている」への回答が共に 37 件 (全体の 46.8%) で最多であった。次いで「農業の後継者がいない」への回答が 26 件 (全体の 32.9%)、「若者が集落を離れる」への回答が 24 件 (全体の 30.4%) であった。

図表 1-12

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	高齢者だけの世帯が増えている	37	46.8
2	子どもの数が減っている	37	46.8
3	近所づきあいが減った	4	5.1
4	家の跡取りがない	13	16.5
5	農業の後継者がいない	26	32.9
6	若者が集落を離れる	24	30.4
7	集落の行事が維持できない	7	8.9
8	耕作放棄地が増えている	7	8.9
9	空き家が増えている	5	6.3
10	通院、買い物等の交通の便	13	16.5
11	その他	2	2.5
12	特に不安はない	2	2.5
	不明	7	8.9
	計(%ベース)	79	100

問 13 今後も現在の場所に住み続けたいか (択一回答)

「今後も現在の場所に住み続けたいか」という質問項目に関して、「このまま住み続けた

い」という回答が 63 件（全体の 79.7%）と大半であった。

図表 1-13

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	このまま住み続けたい	63	79.7
2	村内で別の地区に住みたい	1	1.3
3	県内のほかの市町村に住みたい	3	3.8
4	県外に住みたい	3	3.8
	不明	9	11.4
	計(%ベース)	79	100

問 14 移転したい理由（択一回答、問 13 で 2,3,4 に回答した方のみ回答）

堂畑地区以外の地域に住みたいという回答が 7 件あったが、内 4 件が移転したい理由について、「便利なまちなかで暮らしたいため」というものであった（図表 1-14）。

また、移転したいと回答した方に、将来堂畑地区に戻ってくるかどうかをたずねたところ、「あまり戻らなつもりはない」が 3 件、「機会があれば戻らつもりである」が 2 件、「戻らない」1 件の順となった（図表 1-15）。

図表 1-14

No.	カテゴリ	件数
1	子どもと同居するため	0
2	親戚と同居するため	0
3	進学、就職、仕事の関係のため	1
4	高齢者施設に入所するため	0
5	便利なまちなかで暮らしたいため	4
6	その他	2
	計(%ベース)	7

図表 1-15

No.	カテゴリ	件数
1	いずれ戻ってくる	0
2	機会があれば戻らつもりである	2
3	あまり戻らつもりはない	3
4	戻らない(戻れない)	1
	計(%ベース)	6

(5) 地区の活性化に関する質問（問 16～17）

（質問内容：地区活性化のために行うべきこと、どんな地区になればよいか）

問 16 堂畑地区活性化のために今後行うべきこと（3 つまで回答）

「堂畑地区活性化のために今後行うべきこと」という質問項目に関して、「集落の若者が主体となった活動」が 36 件（全体の 45.6%）と最も多かった。次いで多かった回答は「移住者の受け入れ」で 20 件（全体の 25.3%）、「空き家の活用」が 17 件（全体の 21.5%）であった。

また、「その他」として「若者の定住化対策」という自由記入意見があった。

図表 1-16

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	農産物を外部にアピールする	10	12.7
2	空いてる蔵の活用	6	7.6
3	空き家の活用	17	21.5
4	移住者の受け入れ	20	25.3
5	農家民泊、農業体験の受け入れ	5	6.3
6	地区の人々が集まる行事を増やす	15	19.0
7	集落の若者が主体となった活動	36	45.6
8	農産物加工や直売活動	2	2.5
9	高齢者の技術を伝承する場をつくる	7	8.9
10	お祭りや伝統行事の復活	10	12.7
11	その他	3	3.8
12	特に何か行う必要はない	8	10.1
	不明	10	12.7
	計(%ベース)	79	100

問 17 堂畑地区が今後どんな地区になればいいと思うか (3つまで回答)

「堂畑地区が今後どんな地区になればいいと思うか」という質問事項に関して、「若者の働く場所が確保されている地区」が 31 件 (全体の 39.2%) と最も多かった。次いで「交通の便がよく、暮らしやすい地区」が 29 件 (全体の 36.7%)、「自然や観光を大切にする地区」が 26 件 (全体の 32.9%)、「高齢者が元気で長生きできる地区」が 24 件 (全体の 30.4%) の順であった。

図表 1-17

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	自治活動が盛んな地区	19	24.1
2	高齢者が元気で長生きできる地区	24	30.4
3	歴史や伝統を大切にする地区	6	7.6
4	若者の働く場所が確保されている地区	31	39.2
5	自然や環境を大切にする地区	26	32.9
6	交通の便がよく、暮らしやすい地区	29	36.7
7	農業が盛んな地区	12	15.2
8	外部の人との交流が盛んな地区	8	10.1
9	その他	2	2.5
10	特にない	5	6.3
	不明	8	10.1
	計(%ベース)	79	100

(6) 道の駅に関する質問 (問 18~19)

(質問内容：道の駅にかかわる活動の有無、盛り上げるため必要な活動)

問 18 道の駅に関する活動をしているか (複数回答)

「道の駅に関する活動をしているか」という質問事項に関して、「客として買いに行く」が 45 件 (全体の 57.8%) と半数以上を占めていた。次いで「全く関わっていない」

が 26 件（全体の 32.9%）であった。「農産物を出荷している」は 5 件、「従業員として働いている」は 1 件のみと少数であった。

図表 1-18

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	農産物を出荷している	5	6.3
2	加工品や工芸品を出品している	0	0.0
3	従業員として働いている	1	1.3
4	清掃などのボランティアをしている	0	0.0
5	客として買い物に行く	45	57.0
6	その他	2	2.5
7	全く関わっていない	26	32.9
	不明	5	6.3
	計(%ベース)	79	100

問 19 道の駅を盛り上げるために必要なこと（複数回答）

「道の駅を盛り上げるために必要なこと」という質問事項に関しては、「湯川産の農産物の出荷を増やす」が 31 件（全体の 39.2%）で最多であった。次いで「湯川への観光客を増やす」が 29 件（全体の 36.7%）、「湯川の食材を活用した加工食品の開発」が 28 件（全体の 35.4%）であった。自由記入としては、「イベントの開催」（2 件）のほか、「高速バスの発着の増便、湯川村会津坂下町を循環するリムジンバス（高齢者、子供たちが駅を利用できる）」という意見があった。

図表 1-19

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	湯川産の農産物の出荷を増やす	31	39.2
2	湯川の食材を活用した加工食品の開発	28	35.4
3	集荷サービスなど高齢者支援の仕組み	19	24.1
4	湯川らしい工芸品、民芸品の開発	9	11.4
5	野菜作りなど米・果樹以外の作物振興	19	24.1
6	湯川の食材を使った料理教室	14	17.7
7	市民農園や農作業体験等	9	11.4
8	湯川への観光客を増やす	29	36.7
9	その他	3	3.8
10	特に何か行う必要はない	5	6.3
	不明	7	8.9
	計(%ベース)	79	100

(7) 地区内の移住者に関する質問（問 20～22）

（質問内容：空き家を活用した移住者の受け入れ、移住者に期待すること、移住者との関わり）

問 20 空き家を活用した移住者の受け入れについて（択一回答）

「空き家を活用した移住者の受け入れについて」の質問事項に関して、「どちらかという  
と受け入れていくべき」が 39 件（全体の 49.4%）と最も多く、次いで「積極的に受け入れ  
ていくべき」が 19 件（全体の 24.1%）であり、比較的受け入れに積極的な回答が多かった。  
一方で、「あまり受け入れるべきでない」が 5 件（全体の 6.3%）、「受け入れる必要はない」  
が 3 件（全体の 3.8%）あり、受け入れに消極的な回答もわずかであるが見受けられた。

図表 1-20

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	積極的に受け入れていくべき	19	24.1
2	どちらかという受け入れていくべき	39	49.4
3	あまり受け入れるべきではない	5	6.3
4	受け入れる必要はない	3	3.8
5	わからない	10	12.7
	不明	3	3.8
	計 (%ベース)	79	100

問 21 地域に入ってくる移住者に期待すること（3つまで回答）

「地域に入ってくる移住者に期待すること」の質問事項に関して、「集落の行事にきちんと  
参加してほしい」が 42 件（全体の 53.2%）と最多であった。次いで「地域に溶け込む努  
力をしてほしい」が 37 件（全体の 46.8%）、「地域で子育てしてほしい」が 36 件（全体の  
45.6%）であった。自由意見としては、「地域に染まるのではなく自分の生き方を実践して  
ほしい」というものもあった。

図表 1-21

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	地域で子育てしてほしい	36	45.6
2	集落の行事にきちんと参加してほしい	42	53.2
3	地域に溶け込む努力をしてほしい	37	46.8
4	農業に就業してほしい	14	17.7
5	地域活性化の取り組みをしてほしい	10	12.7
6	その他	1	1.3
7	何も期待していない	5	6.3
8	わからない	10	12.7
	不明	1	1.3
	計 (%ベース)	79	100

問 22 移住者との関わりや交流について（択一回答）

「移住者との関わりや交流について」の質問事項に関して、「どちらかという関わって  
いきたい」が 36 件（全体の 45.6%）と最多であり、次いで「積極的に関わっていき  
たい」が 22 件（全体の 27.8%）と、移住者との交流に積極的な回答が多かった。一方で、「あ  
まり関わりたくない」への回答が 4 件（全体の 5.1%）、「まったく関わりたくない」への  
回答が 1 件（全体の 1.3%）あり、交流に消極的な回答も少し見受けられた。

図表 1-22

No.	カテゴリ	件数	(全体)%
1	積極的に関わっていきたい	22	27.8
2	どちらかというに関わっていきたい	36	45.6
3	あまり関わりたくない	4	5.1
4	まったく関わりたくない	1	1.3
5	わからない	15	19.0
	不明	1	1.3
	計 (%ベース)	79	100

#### (8)住民アンケートの自由記入に寄せられた意見

アンケートの最後に自由記入欄を設けたところ、多くのご意見をいただいた。大きく分類すると、「活動への期待」、「地区への提案」、「地区への意見」、といった3つの内容にまとめることができ、どれも地区の活性化に向けて考えられているものだった。また、「地区について考え直すきっかけになった」「○○という項目を追加してほしい」などアンケート内容に対する意見も多数あったので、次年度以降の活動に活かしていきたい。

##### ○活動への期待

- ・ 「今回のような関わり方を、数年おきに行ってもらい村の人との交流が増えればそれだけで十分に活性化につながると思います。」
- ・ 「今後、アンケートを参考にさせていただいて、数年後どのようなようになったか調査していただきたいと思います。」

##### ○地区への提案

- ・ 「地区は野菜作りが盛んですが若い人達は作り方がわからないので高齢者の方々に作り方の講習会などがあつたらいいかなーとも思う。」
- ・ 「米作りや野菜作りに活気があまりないので魅力ある農業になっていけばプライドを持って生活していけると思っています。生活費が確保できてやりがいのある農業があれば私も参加したいです。変に都市化するのではなく農業で活性化すれば良いなと思います。」

##### ○地区への意見

- ・ 「現在ちょっと気になることは若い人(40代)の意識の変化です。例えば私たちの頃は消防の場合、出初式など前もってわかることは休暇をとるなど準備して居りましたが最近では仕事優先、家庭優先等で欠席する方が多く、もし何かあつたらと考えると少々心配です。」
- ・ 「地域の行事や仕事を減らすことも大切だと思う。伝統を継承することも大事だが、軽減することで住み易くなることもある。地域の草刈り等、外部委託も考えてみてはどうか。住み易くなれば活性化すると思う。堂畑地区内に新興住宅をつくってほしい。」



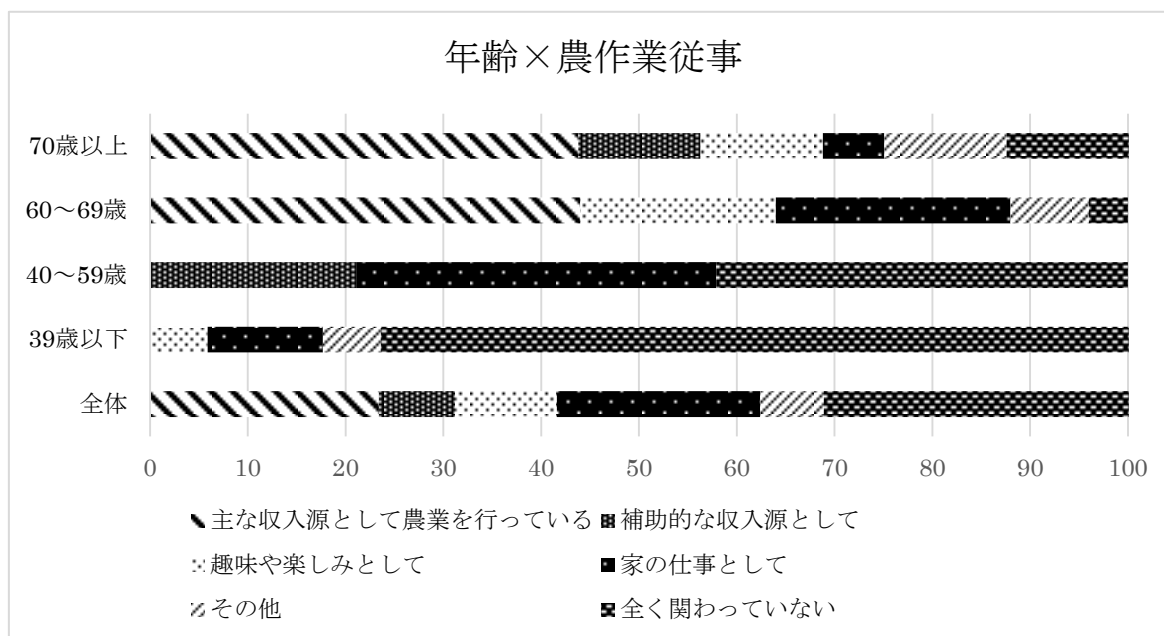
### 第3節 クロス集計結果

クロス集計とは、アンケートの内容から複数個の項目を抽出して、データ集計を行う手法である。

#### (1) 年齢×農作業従事（問2×問5）

年齢別に「農作業従事」についてみると、「全く関わっていない」の回答は39歳以下で最も多い。59歳以下では「主な収入源として農業を行っている」と回答した人は0であり、「補助的な収入源として」、「家の仕事として」という回答があった。60歳以上では「主な収入源として農業を行っている」への回答が多い。

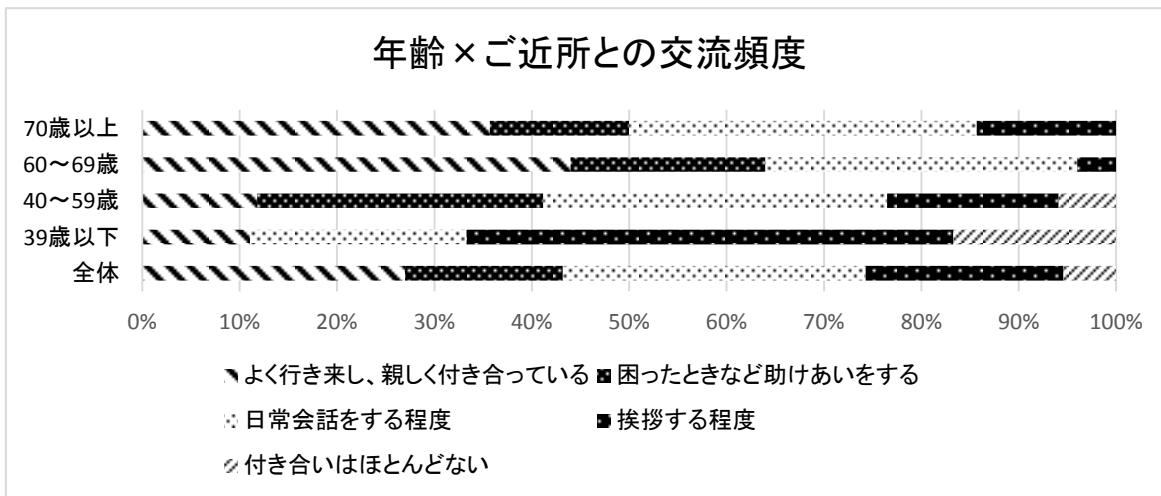
図表 2-1



#### (2) 年齢×ご近所との交流頻度（問2×問8）

ご近所との交流度合いを年齢別に見ると、高齢者の世代ほどご近所と親しく交流しており、若い世代ほど付き合いがないという傾向が見られた。

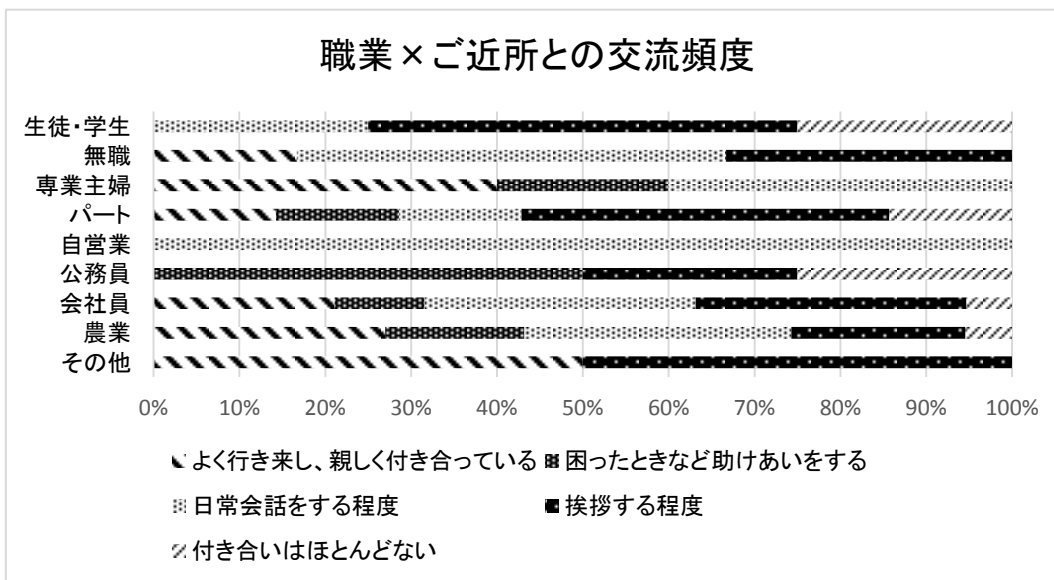
図表 2-2



(3) 職業 × ご近所との交流頻度 (問 3 × 問 8)

ご近所との交流度合いを職業別に見ると、「農業」では「親しく付き合っている」などの選択肢に回答が多く、活発に交流が行われている。しかし、「会社員」では上記のような特徴はなく、「日常会話をする程度」や「挨拶する程度」などの選択肢に多く回答が集まっており、「農業」の方ほど活発に交流が行われていないと言える。

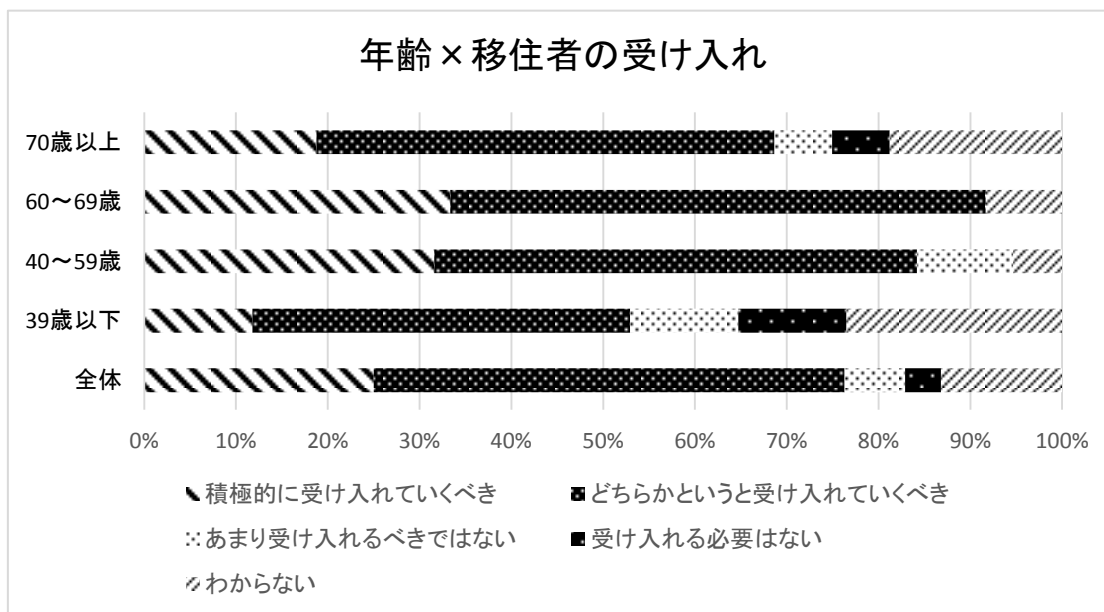
図表 2-3



(4) 年齢 × 移住者の受け入れ (問 2 × 問 20)

移住者の受け入れについて年齢別に見ると、40~69歳では受け入れに積極的な回答が多かった。

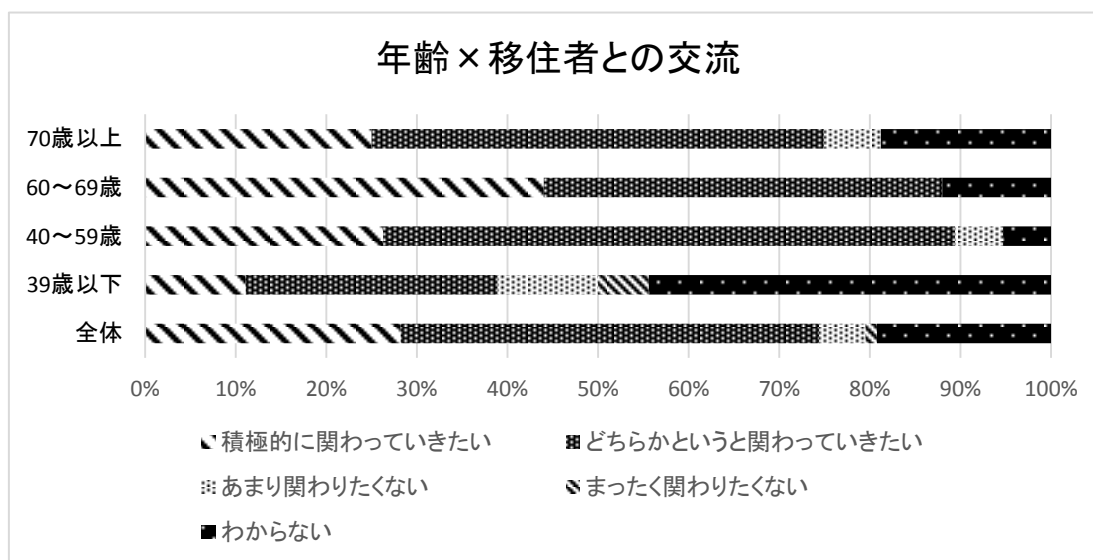
図表 2-4



(5) 年齢×移住者との交流 (問 2×問 22)

移住者との交流について年齢別に見ると、上の世代では交流に積極的な回答が多かった。一方で若い世代では、「わからない」という回答が多い。

図表 2-5



#### 第4節 アンケート調査のまとめと考察

アンケートの回答者の多くは60歳以上の方で、若い世代は少なかった。また、農業を職業としている方のほか、趣味や家の仕事として農業を行っている方もおり、多くの住民が何らかの形で農業に携わっていることが分かった。しかし、若い世代では農業に全く関わっていないという方が多かった。

年齢とご近所との交流頻度を見ると、60歳以上の世代ほどご近所と親しく交流しており、若い世代ほど付き合いがないということが分かる。しかし、堂畑地区のバーベキューでは若い人の姿も多く見られ、地区の行事にまったく参加していないわけではない。若い人も参加しやすい住民同士の交流の場をもっと設けることができればよいのではないかと考える。

堂畑地区の好きなところに関する質問では「住み慣れていて暮らしやすい」「自然・景観」への回答が多かった。堂畑地区に愛着を持っている方が多いといえる。しかし、地区の好きなところの自由記入欄への記入が少なく、アンケートの回答項目に回答しただけという方が多かった。堂畑地区には米以外の食資源や神輿、子どもたちなど「お宝」が沢山あることが調査で分かったので、住民の方たちに地区の「お宝」に気付いてもらうことが地区の活性化のために重要なことであると考えます。

問11の「堂畑地区に足りないもの、必要と思うもの」についての質問では「若者の力」という回答が3番目に多く、また、問16の「堂畑地区活性化のために今後行うべきこと」の質問では「地区の若者が主体となった活動」への回答が最も多かった。この背景として、若者が減少したことにより青年団が人員不足になり神楽を継続することができなくなったこと等が挙げられると考える。若者の減少に住民が危機感を持っていることがうかがえる。

「道の駅との関わり」について、多くの住民は道の駅に買い物には行くが、実際に農産物を出荷している住民は少数であった。一方で、「道の駅を盛り上げるために必要なこと」についての質問では、「湯川産の農産物の出荷を増やす」への回答が最も多いという結果であった。

空き家を活用した移住者の受け入れについての質問では、受け入れに積極的な回答が多かったが、若い世代や高齢者では「わからない」とする回答が比較的多かった。

## 第5章 道の駅消費者アンケートの結果と考察

### 第1節 「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」の概要

「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」は2014（平成26）年10月にオープンした道の駅である。この道の駅は、株式会社組織での経営となっており、湯川村・会津坂下町の自治体の他に18社の民間企業が出資している。

道の駅の中には、会津盆地の農家の皆さんが作った野菜が販売されている「農産物マーケット」や、会津地域の品々が販売されている「あいづ物産館」、湯川・会津坂下町近郊の農家の方々が作った野菜や米をふんだんに使った「農家レストラン」があり魅力あふれる道の駅だ（「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」ホームページ <http://heso-aizu.jp/about>）。

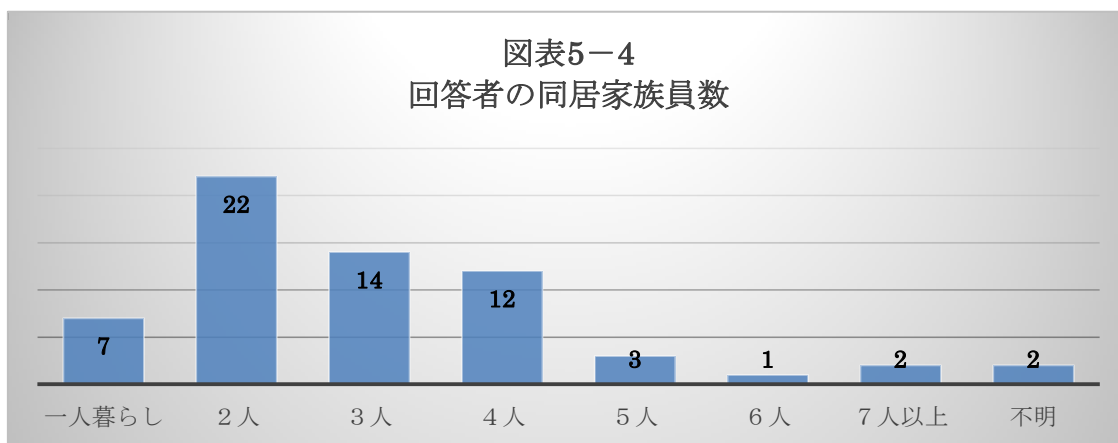
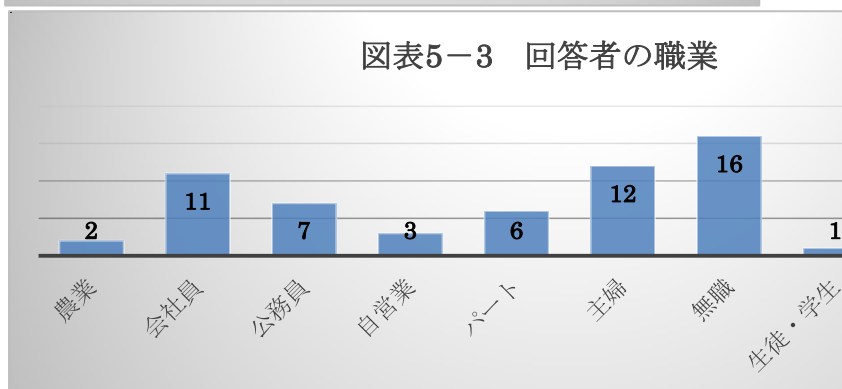
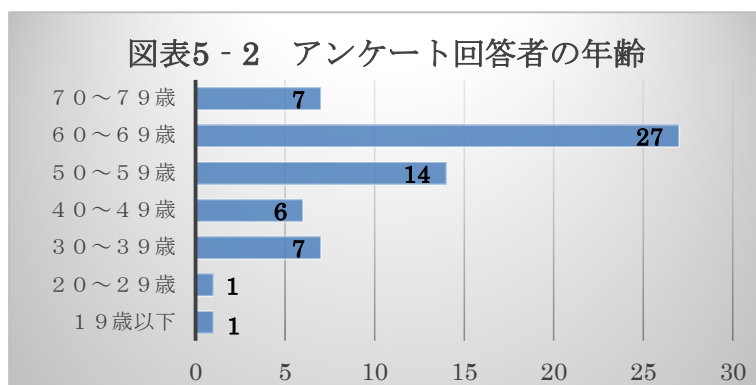
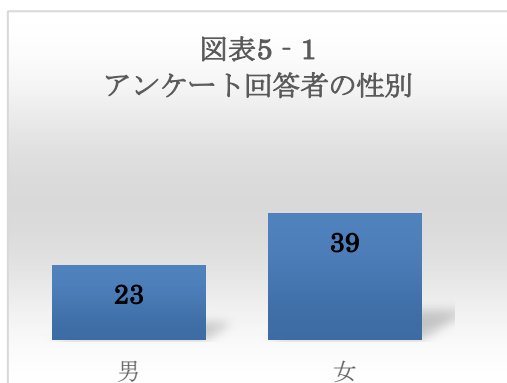
「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」駅長の神田さんの話によると、この道の駅は、『道の駅を訪れる方々がジェラートやコーヒーを召し上がりながら、第二のリビングルームとしてゆっくり過ごしてほしい』という思いから、おいしいものが食べられ、ゆったり過ごせる場所がつくられている。また、広い駐車場があるため、他の道の駅よりも訪れる方の滞在時間が長い道の駅となっている。神田駅長の話によると、会津ナンバーの車の滞在時間は他の駅は平均30分くらいだが、「道の駅 あいづ 湯川・会津坂下」での調査結果では、平均52分の滞在で、最長が1時間8分だったという。

また、この道の駅は、訪れる方々が飽きないよう、心を掴み続けるために、道の駅でのイベントを年間100本行うなど、ある時はショッピングセンター、あるときは百貨店、ライブハウスなど様々な顔をもつ道の駅にしようと心がけている。

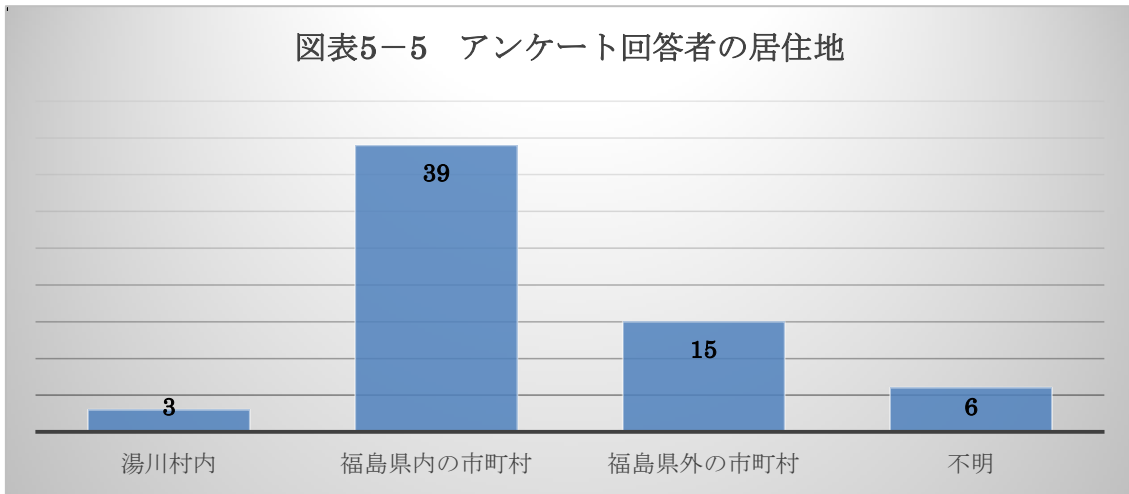
### 第2節 アンケート集計結果

2016年10月9日に道の駅あいづ湯川・会津坂下で開催された「新米祭り」の来場者を対象に、道の駅や食と農、湯川村のイメージに関するアンケート調査を実施した。計63名の方に回答していただくことができ、なかには県外からの来場者もいたため多様な方からご意見を伺うことができた（調査票は付属資料として後掲）。

まず、アンケートに回答して下さった 63 人の性別、年齢、職業、同居家族員数、居住地をまとめたものをグラフ（図表 5-1～5-5）に表した。性別は女性がやや多く、60 歳代の方が最も多い。職業としては、「無職」「会社員」「主婦」が多い回答だった。同居家族員数は「2名」という回答が最も多い。居住地は、「福島県内の市町村」が 39 名と 6 割を占め、次いで「福島県外の市町村」の方が 15 名であった。



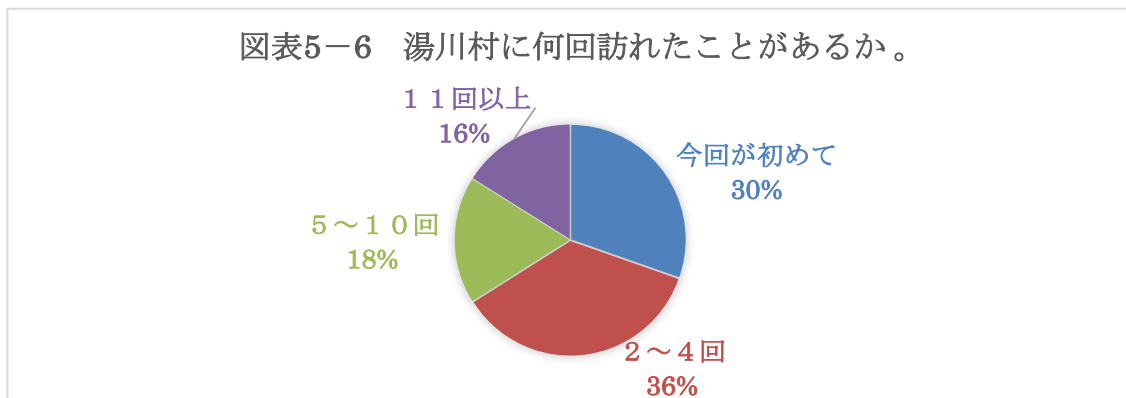
図表5-5 アンケート回答者の居住地



問1 湯川村に何回訪れたことがあるか。

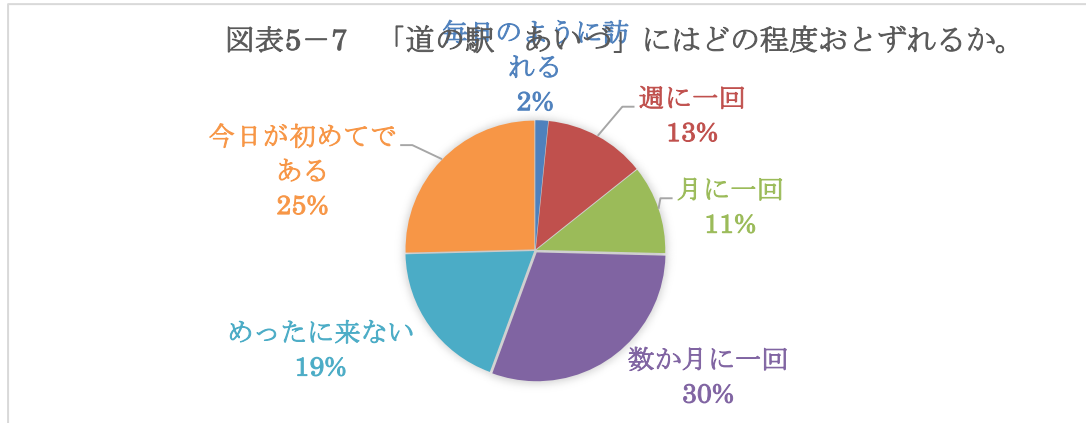
湯川村民以外の方に、湯川村への訪問回数を伺ったところ、「2～4回」という回答が最も多く（36%）、次いで「今回が初めて」（30%）の順となった。

図表5-6 湯川村に何回訪れたことがあるか。



問2 「道の駅 あいづ」にはどの程度訪れるか。

図表5-7によれば、「数ヶ月に1回」が30%。「今日が初めてである」25%、「めったに来ない」19%が多い回答であった。今回、道の駅「新米まつり」のイベントが開催されたときに調査を実施しており、回答者のなかには遠方からのツアー客もいらした。それもあって、図表5-7から分かるように、「数ヶ月に1回」「今日が初めてである」「めったに来ない」という回答が多くを占めたと思われる。



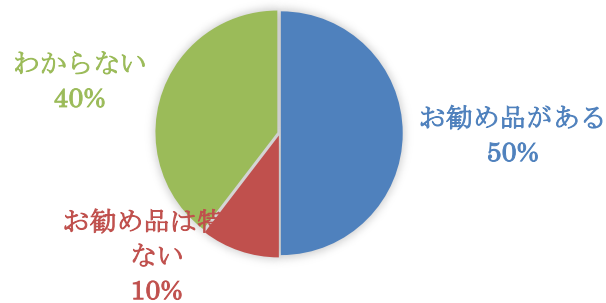
問3 「道の駅あいつ」で売っているもので、勧めたいと思った品物はあるか。

図表 5-8 より、「お勧め品がある」と回答した人が全体の半分を占めた。お勧め品を具体的に書いてくださったのは22名であり、内容は以下のとおりであった。湯川村の代表的な作物である米、また、野菜といった農作物が多くを占めた。

- ・野菜
- ・新鮮な野菜、山菜、はちみつ
- ・産直の農産物
- ・新米、ジェラート
- ・くだもの
- ・野菜、米、そば
- ・野菜、米
- ・野菜
- ・ソフトクリーム
- ・味噌、はちみつ
- ・植木、花
- ・お米
- ・お米
- ・花、野菜
- ・米
- ・くだもの
- ・お米
- ・米・野菜
- ・農産物
- ・野菜
- ・赤べこ
- ・野菜



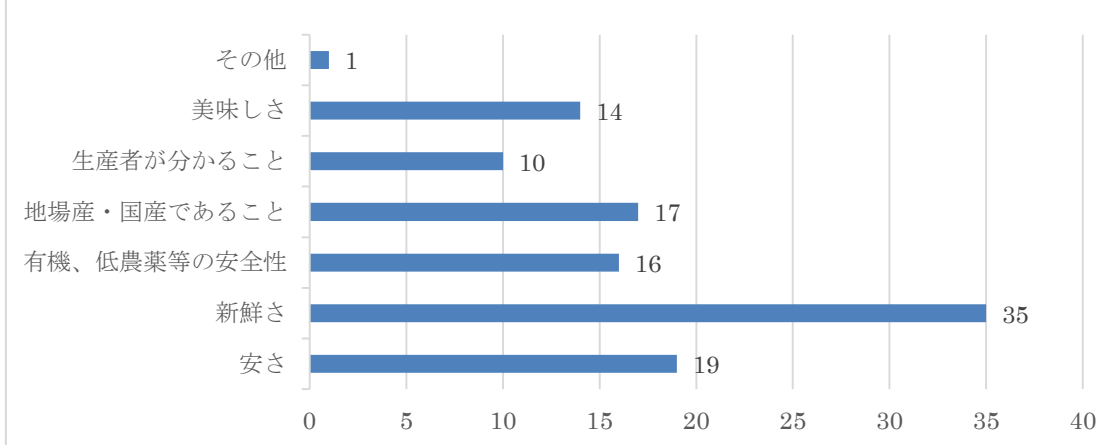
図表5-8 「道の駅あいづ」で売っているもので、勧めたいと思った品物はあるか。



#### 問4 農作物に求めるもの（3つまで回答）

図表 5-9 の結果から、一番には「新鮮さ」を求める人が多いことが分かった。次いで、「安さ」、「地場産・国産品であること」が多かった。表出は省くが、年齢ごとのクロス集計を行ったところ、「新鮮さ」の次に割合の高い回答は、40～59歳、60～69歳では「地場産・国産であること」であるのに対し、39歳以下では「価格の安さ」の割合が高かった。

図表5-9 農産物に求めるもの



#### 問5 食生活について

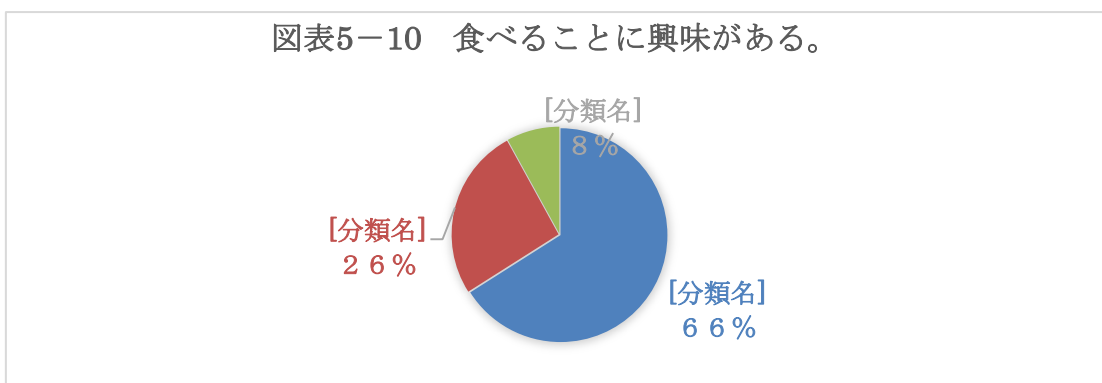
この質問では、自分の食生活について5段階（非常にあてはまる、ややあてはまる、どちらともいえない、あまりない、全くない）で評価をしてもらった。

(ア)「食べることに興味がある。」

「非常にあてはまる」と回答した人が66%、「ややあてはまる」が26%という結果になり、合わせて9割の人は食べることに興味があることがわかった(図表5-10)。さきほども述べた通り、道の駅での「食」に関するイベントへの参加者が回答してくださったこともあり、

このような結果になったと思われる。しかし、クロス集計により（表出は略）男性と女性での回答の割合を見ると、「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」と答えた男性回答者の割合はそれぞれ4割だが、女性の場合、女性回答者全体の80.6%が「非常にあてはまる」を回答していた。また、39歳以下の回答者では「非常にあてはまる」を回答したのが87.5%に対し、40～59歳以下の回答者は73.3%と、『女性で、59歳以下』の方は、特に「食」に興味があることが分かった。

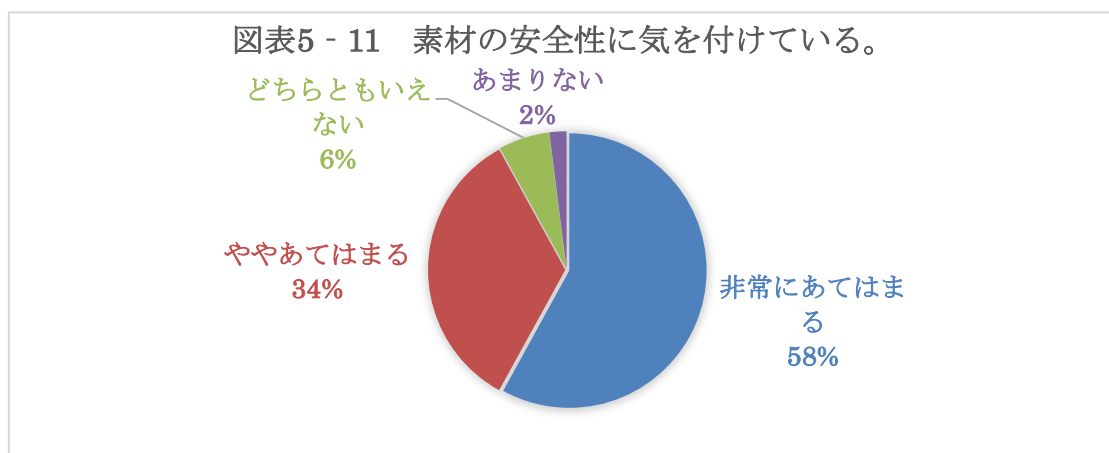
図表5-10 食べることに興味がある。



(イ)「素材の安全性に気を付けている。」

図表5-11より、「非常にあてはまる」と回答した人が66%、「ややあてはまる」が26%という結果になり、「あてはまる」と回答した方が、9割を占めた。そのなかでも、「非常にあてはまる」と回答した方は6割にのぼり、「安全性」は消費者にとってやはり大事なものだと考えられる。また、男女別の回答では（表出は略）、男性回答者の31.6%が「非常にあてはまる」、57.9%が「ややあてはまる」、女性回答者の74.2%が「非常にあてはまる」、19.4%が「ややあてはまる」と回答しており、女性は家事等を行うことが多いからこそ、特に安全性を求める傾向があると考えられる。

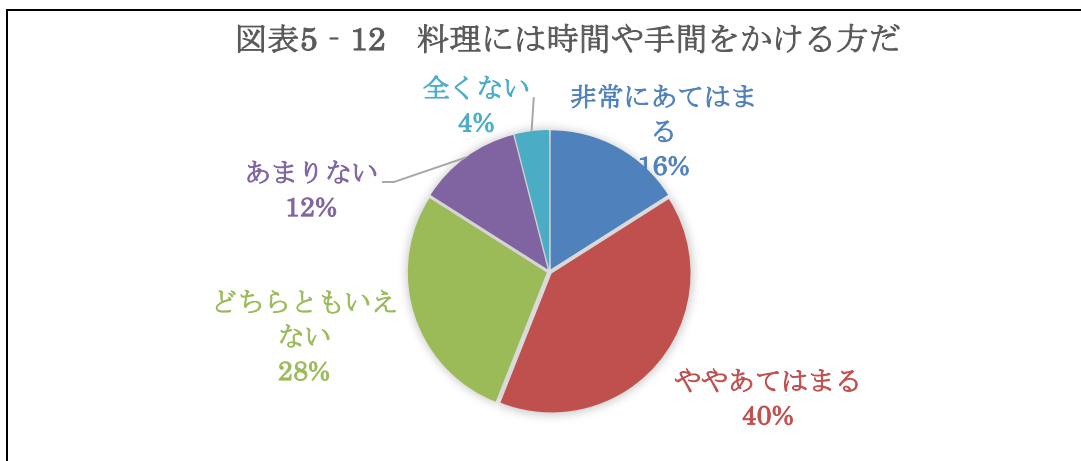
図表5-11 素材の安全性に気を付けている。



(ウ)「料理には時間や手間をかける方だ。」

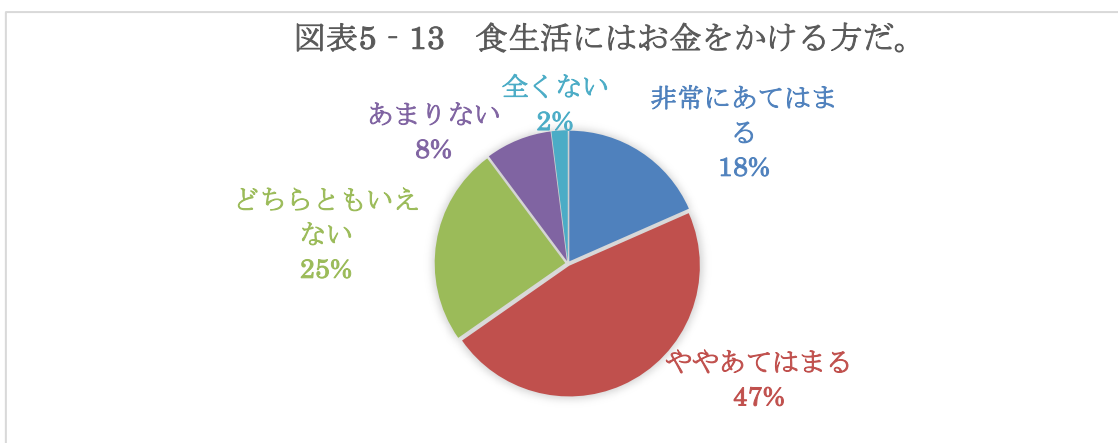
図表5-12より、「ややあてはまる」と回答した方が多かった。男女別では（表出は略）、男性の回答者は「ややあてはまる」と回答した方が少し多いものの、どの項目も同じくらいの割合だった。女性回答者は、「ややあてはまる」と答えた方が女性回答者の41.9%占め

ていた。また、年齢ごとの回答では、39歳以下で「非常にあてはまる」と回答した方がおらず、「あまりない」と回答した方が、39歳以下の回答者の半分を占めていた。39歳以下の年代は、仕事や育児等で忙しい方が多く、料理に時間をかけることは難しいのではと考えられる。逆に年齢が上がってくるにつれて、「非常にあてはまる」と答える方の割合が高くなるため、育児もひと段落し、仕事も退職をすると、料理にかける時間を確保出来るのではと感じた結果だった。



(エ)「食生活にはお金をかける方だ。」

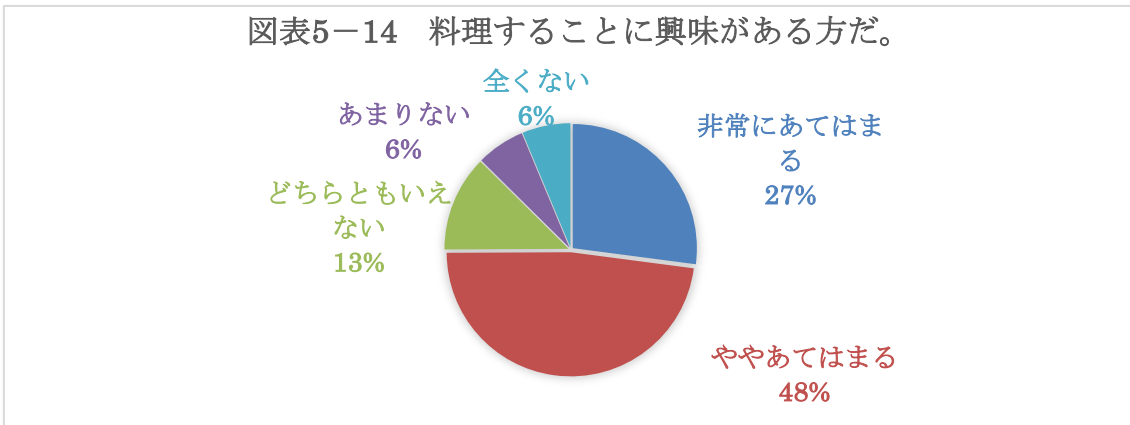
図表5-13より、「ややあてはまる」と回答した方が全体の約半分を占めていた。年齢別に見ると（表出は略）、40～59歳で「どちらともいえない」と回答した方が、その年代の46.7%を占めていた。教育費でお金のかかる世代のためかもしれない。この40～59歳の46.7%を占める「どちらともいえない」の回答者を、食生活にお金をかけようという思考に向けることができると、大きな市場になるのではないかと考えられる。食生活にお金をかけたいと思うようなアピールやイベントを行っていく必要もあるかもしれない。



(オ)「料理することに興味がある方だ。」

図表5-14より、「ややあてはまる」と回答した方が、全体の半分を占めた。また、問5-（ウ）の「料理には時間や手間をかける方だ」と同じようにクロス集計では、年齢が高

くなるほど、「非常にあてはまる」と回答した割合が高くなった（表出は略）。



問6 消費者としてどのタイプが当てはまると思うか。

ここでは、以下の4つの選択肢の中から、自分はどのタイプの消費者に当てはまるか選んでもらった。

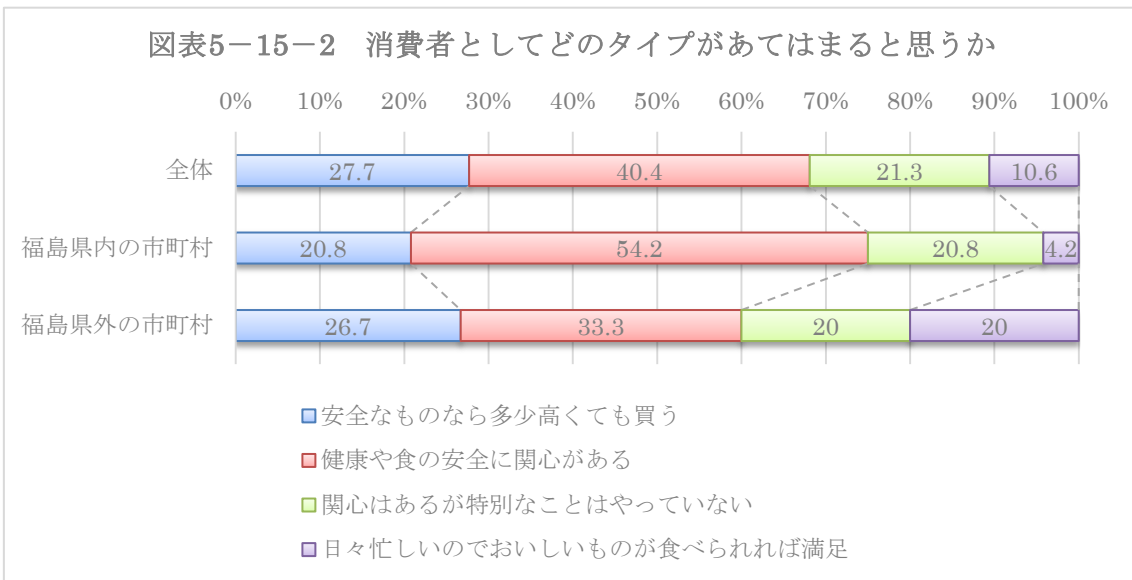
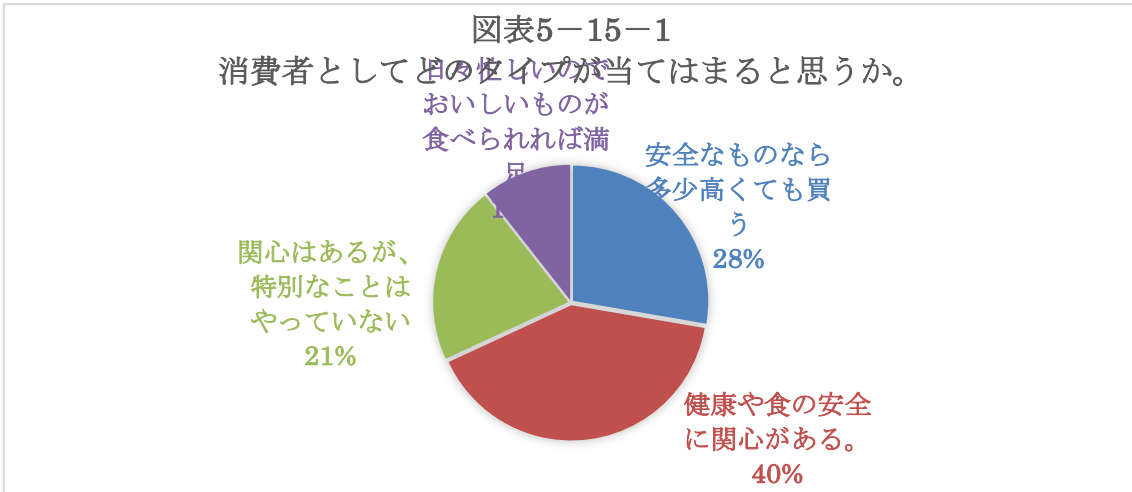
①「食と農」は生命の源なので、安全なものなら多少高くても買うし、援農など農家を支援する活動にもなるべく参加している

②家族の健康や食の安全性を守るために食生活に注意しているし、生協の購入活動や産直などもよく利用している

③食の安全性や家族の健康には日頃より注意するようにしているが、特別なことはやっていない

④日々忙しくて、食のことは大事だと思うが、おいしいものが食べられればそれで満足だ

結果を見ると（図表 5-15-1）、「②健康や食の安全に関心がある」と答えた方が多かった。表出は略するが、男女別では、女性回答者の方が「健康や食の安全に関心がある」の回答が多かった。居住地別のクロス集計をみると（図表 5-15-2）、福島県外の市町村の方は、回答の割合がほぼ均等だったが、福島県内の市町村の方は、「健康や食の安全に関心がある」を回答した方が 54.2%を占めていた。これは、震災後の放射能の心配といった問題があったためかもしれない。



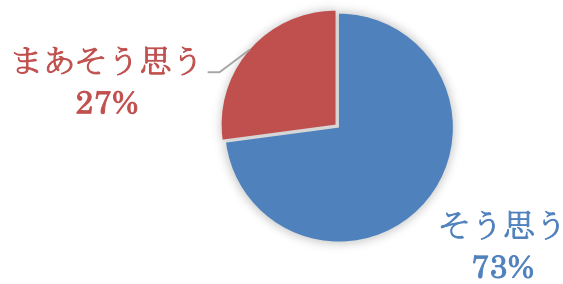
問7 農業や農村に関する意見について

この質問では、農業や農村への意見に対し、4段階（そう思う、まあそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）で評価をしてもらった。

(ア)「農業は「いのち」にかかわる問題なので、もっと農業を大切にすべきだ」

図表5-16から分かるように、「そう思わない」と回答した方はいなかった。農業を大切にすべきと大半の方が考えているということが分かった。

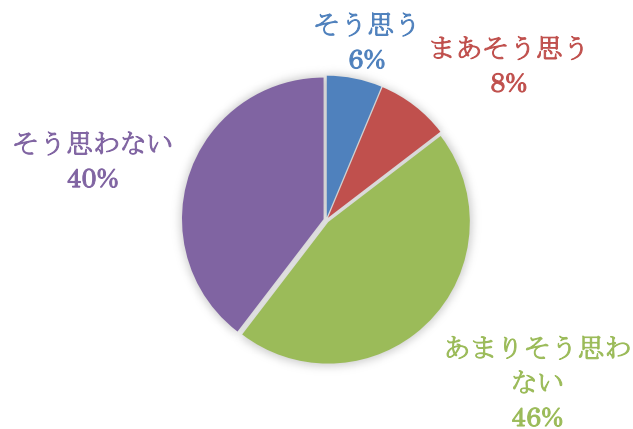
図表5 - 16 もっと農業を大切にすべきだ。



(イ) 外国の安い農作物をもっと輸入すべき。

図表 5-17 をみると、「あまりそうは思わない」が 46%、次いで「そう思わない」が 40% となった。

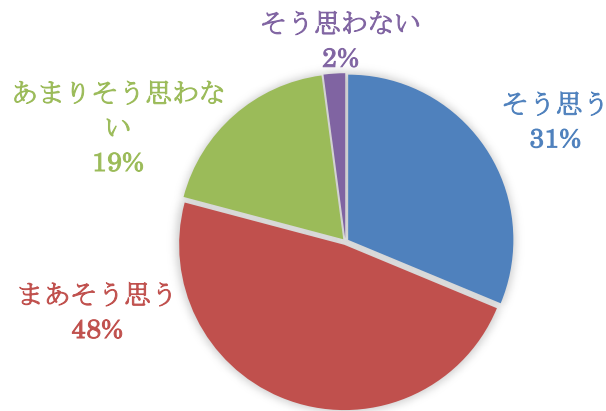
図表5-17 外国の安い農作物をもっと輸入すべき。



(ウ) 「農作物が安全ならば、少しくらい値段が高くなっても構わない。」

図表 5-18 によれば、「まあそう思う」が 48%、次いで「そう思う」が 31%である一方、「あまりそう思わない」の回答も 19%あった。

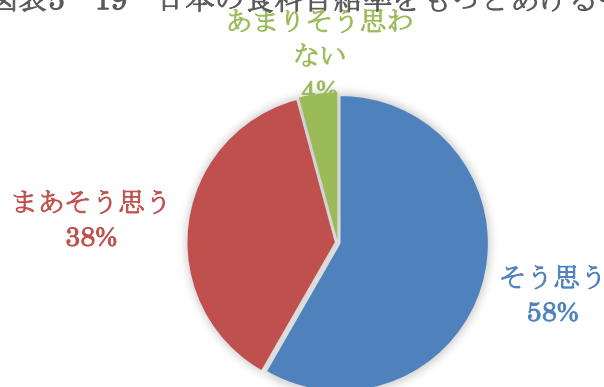
図表5 - 18  
農作物が安全ならば、少しくらい値段が高くなっても構わない。



(エ)「日本の食料自給率をもっとあげるべきだ。」

図表 5-19 のとおり「そう思う」が 58%、「まあそう思う」が 38%となった。日本は食料自給率が低いからこそ、「そう思う」と回答した方が多くを占めたと考えられる。

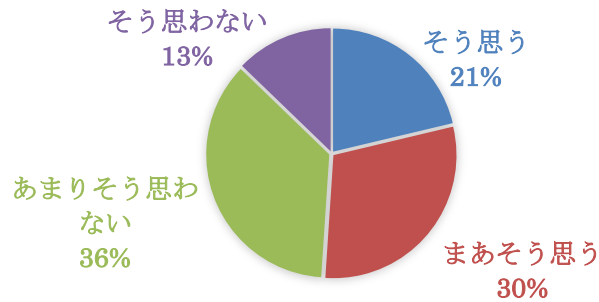
図表5-19 日本の食料自給率をもっとあげるべきだ



(オ)「現在の農業は、保護されすぎている。農業保護対策は改めるべき。」

図表 5-20 をみると、「あまりそう思わない」が 36%、「まあそう思う」が 30%と回答は分散した。居住地別（表出は除く）では、福島県内の出身者の回答者が「あまりそう思わない」「そう思わない」を合わせて6割と高い値を示していた。また、湯川村民の回答者は「そう思わない」と回答していた。

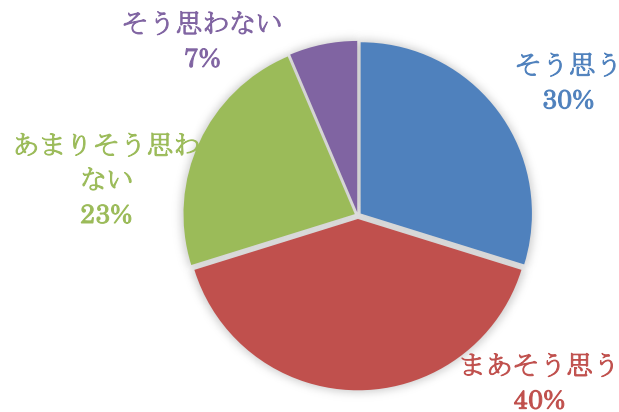
図表5-20  
現在の農業は保護されすぎている。農業保護対策は改めるべき



(カ)「農家は株式会社などの企業的经营を行なうべき。」

図表 5-21 より、「まあそう思う」が 40%と最も多く、ついで「そう思う」が 30%と、肯定的な回答をした方が 7 割を占めていた。他方で、湯川村民の回答者の方は「あまりそう思わない」と「そう思わない」に回答していた。

図表5-21 農家は株式会社などの企業的经营を行なうべき。

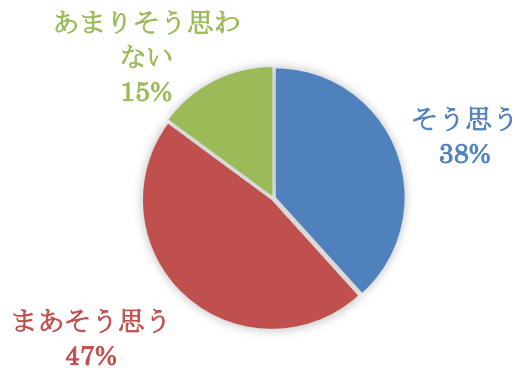


(キ)「税金を投入してでも、棚田や農村は保全したほうが良い。」

図表 5-22 より、「まあそう思う」が 47%と最も多く、次いで「そう思う」を回答した方 38%という順になった。年齢別の集計をみると（表出は略）、39 歳以下、40～59 歳では、「まあそう思う」と回答した割合が最も多いが、60～69 歳、70 歳以上になると、「そう思う」を回答する割合が多いという特徴がみられた。



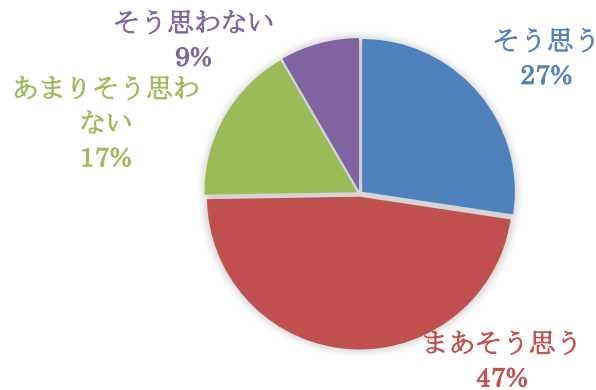
図表5-22  
税金を投入してでも、棚田や農村は保全したほうが良い。



(ク)「人間らしく生きてゆくためには、都会よりも田舎で暮らしたい。」

「まあそう思う」が47%と最も多く、ついで「そう思う」(27%)の順で、肯定的に回答した方が7割を占めていた(図表5-23)。だが、年齢別のクロス集計(表出は略)結果では、39歳以下では「あまりそう思わない」と回答した方が37.5%を占めていた。年齢が高くなるほど、「そう思う」と回答した方が多いという結果になった。

図表5-23  
人間らしく生きてゆくためには、都会よりも田舎で暮らしたい。



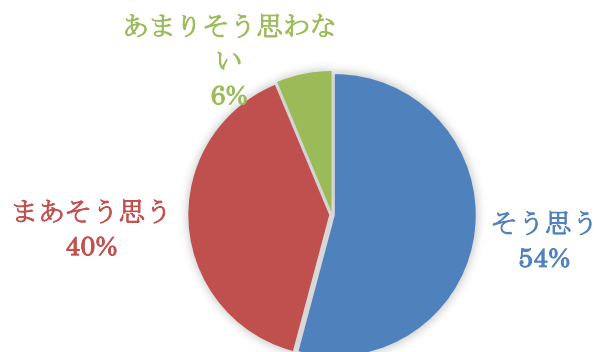
#### 問8 湯川村に対する気持ちやイメージ

この質問では、湯川村に対する気持ちやイメージに関して4段階(そう思う、まあそう思う、あまりそう思わない、そう思わない)で評価をしてもらった。

(ア)「湯川村の自然が好きだ。」

「そう思う」が54%、「まあそう思う」が40%と、湯川村の自然を評価する人は9割を超えた(図表5-24)。

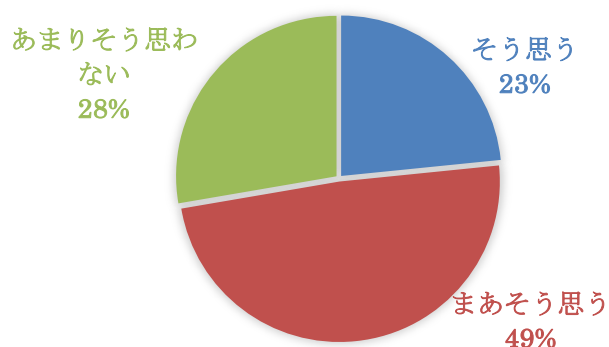
図表5-24 湯川村の自然が好きだ。



(イ)「湯川村は快適な暮らしができる。」

図表 5-25 より、「まあそう思う」が 49%、「あまりそう思わない」が 28%、「そう思う」が 23%の順となり、否定的な意見の回答が 3 割弱あった。

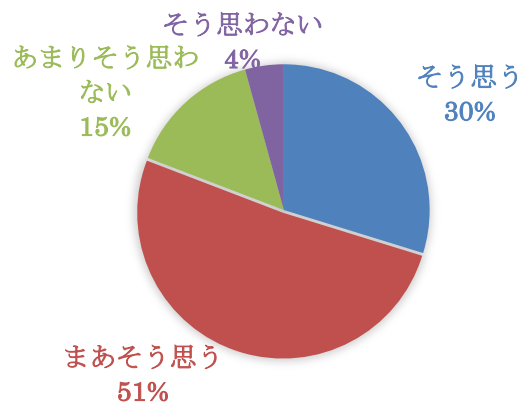
図表5-25 湯川村は快適な暮らしができる。



(ウ)「湯川村は子供を育てるのに適している。」

図表 5-26 より、「まあそう思う」と回答した方が 5 割を占め、「そう思う」と高く評価する意見も 3 割あった。性別で見ると（表出は略）、女性では、「そう思う」の回答の割合が 28.6%に対し、「まあそう思う」が 60.7%と全体よりもやや高い傾向を示している。

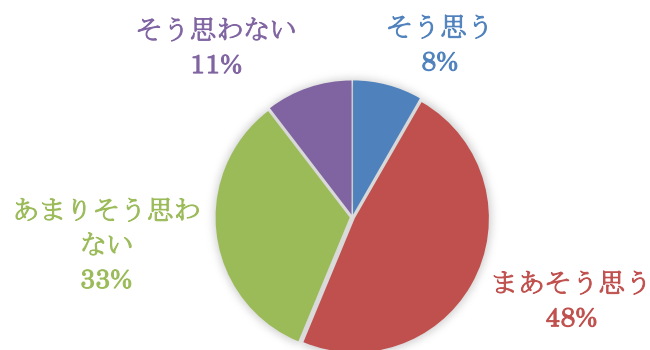
図表5-26 湯川村は子供を育てるのに適している。



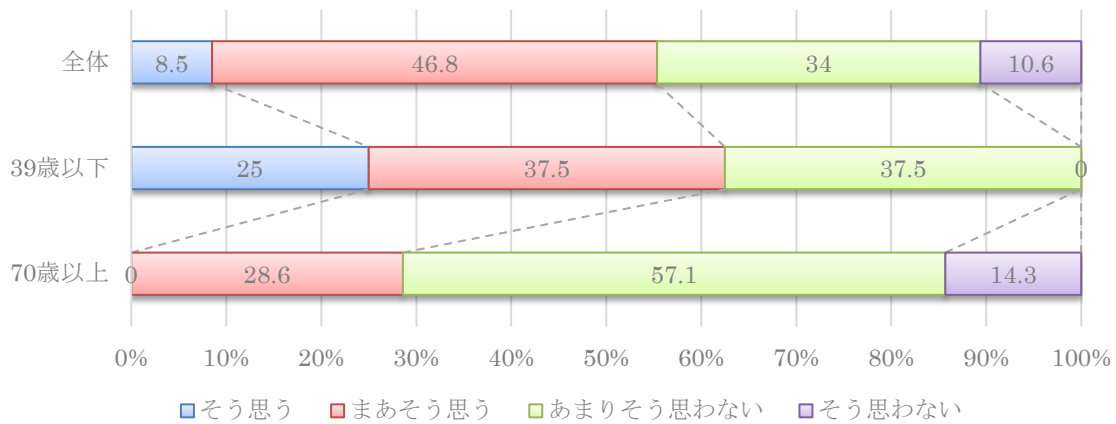
(エ)「湯川村は、医療や介護などの施設が充実している。」

図表5-27-1より、「まあそう思う」が48%を占め、次いで、「あまりそう思わない」(33%)という結果になった。年齢別でみると、図表5-27-2から分かるように、30歳代の回答者では、肯定的な意見が多いのに対し、70歳以上では否定的な意見が7割を占めていた。70歳以上の回答者の中には、「そう思う」と回答者はいなかった。実際に利用する方が多くなる年齢の方から見ると、まだ充実しているとは言えないかもしれない。どうして充実していないように感じているのかが分かるような質問項目も盛り込めばよかったと考えている。今後の課題としたい。

図表5-27-1  
湯川村は、医療や介護などの施設が充実している。



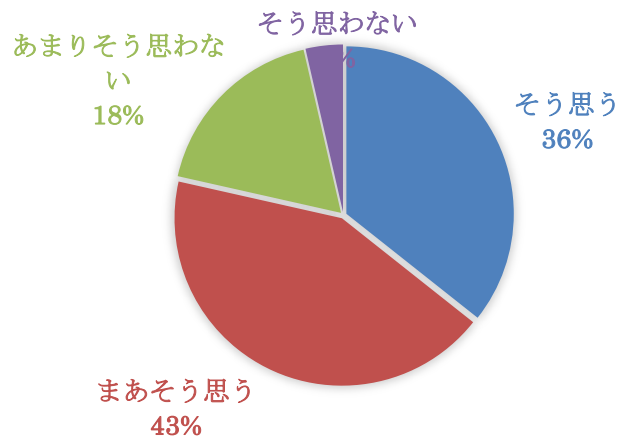
図表5-27-2  
湯川村は、医療や介護などの施設が充実している



(オ)「湯川村には他の地域にない特色がある。」

図表 5-28 より、「まあそう思う」が 43%と最も多く、次いで「そう思う」が 36%という結果になった。「あまりそう思わない」という回答も 18%を占めた。

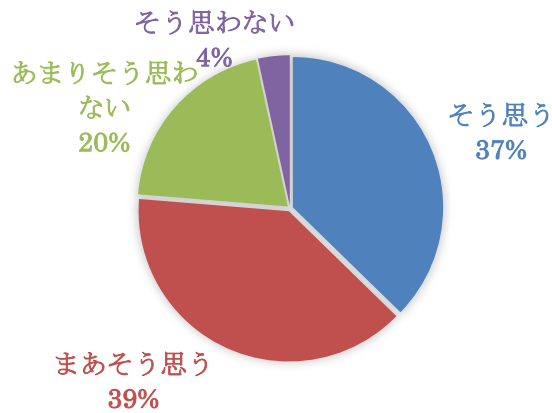
図表5-28  
湯川村には他の地域にない特色がある。



(カ)「湯川村にしかない特産物がある。」

図表 5-29 から分かるように、こちらも「まあそう思う」(39%)、「そう思う」(37%)と回答した方の合計で 7 割を占めた。居住地別では (表出は略)、福島県外の回答者は「そう思う」「まあそう思う」と回答した方が 8 割と、全体よりもやや高い割合を示していた。

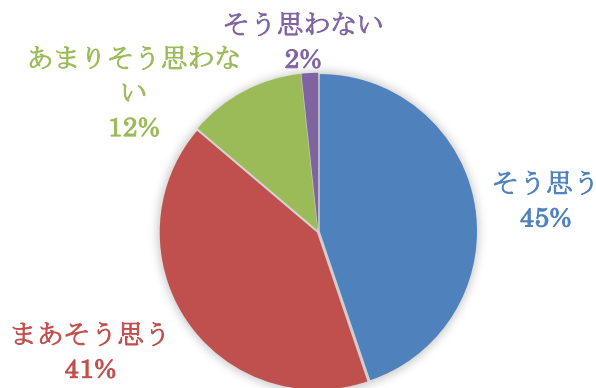
図表5-29 湯川村にしかない特産物がある。



(キ)「湯川村ならではの風景がある。」

図表5-30から分かるように、「そう思う」が45%、「まあそう思う」が41%と肯定的な評価をしている方が8割以上を占めた。湯川村の田園風景は、他の地域でもなかなか見ることが出来ないため、このような結果が出たのではないだろうか。

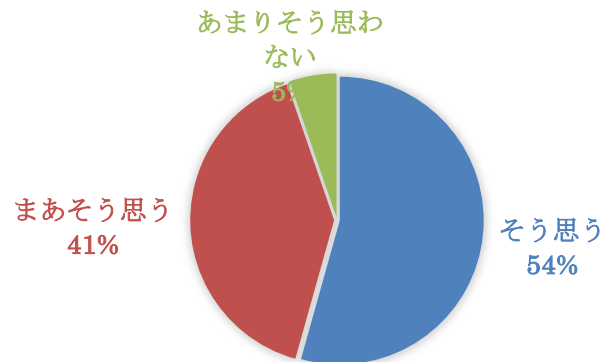
図表5-30 湯川村ならではの風景がある。



(ク)「湯川村は食べ物がおいしい。」

図表5-31から、「そう思う」(54%)、「まあそう思う」(41%)という結果となり、湯川村の食べ物を高く評価する人がきわめて多かった。男女別では(表出は略)、女性の場合「そう思う」「まあそう思う」と回答した割合は100%だった。居住別にみると、福島県外の方も同じく100%であった。湯川村の食べ物をおいしいと思っている方がたくさんいることが分かった。

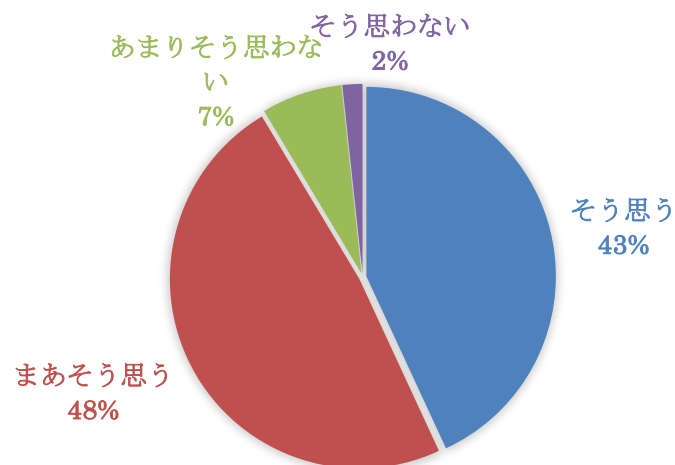
図表5-31 湯川村は、食べ物がおいしい。



(ケ)「湯川村は訪れる価値がある。」

図表5-32より、「まあそう思う」が48%、「そう思う」が43%という結果となった。また、男女別では（表出は略）、女性の回答者が「まあそう思う」と答えた割合は56.8%に対し、男性の回答者の場合は「そう思う」が55%を占め、男性の方が「訪れる価値がある」と感じているという結果には少し意外だった。

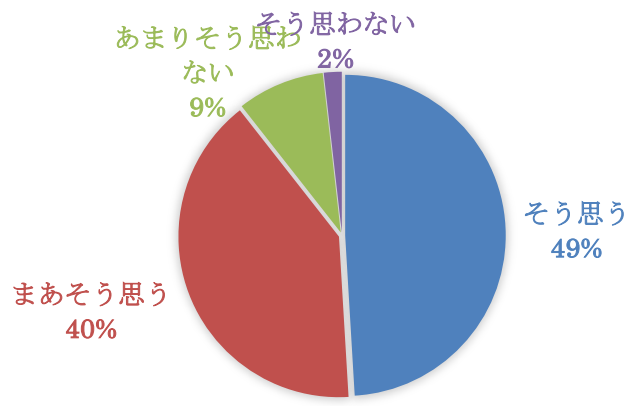
図表5-32 湯川村は訪れる価値がある。



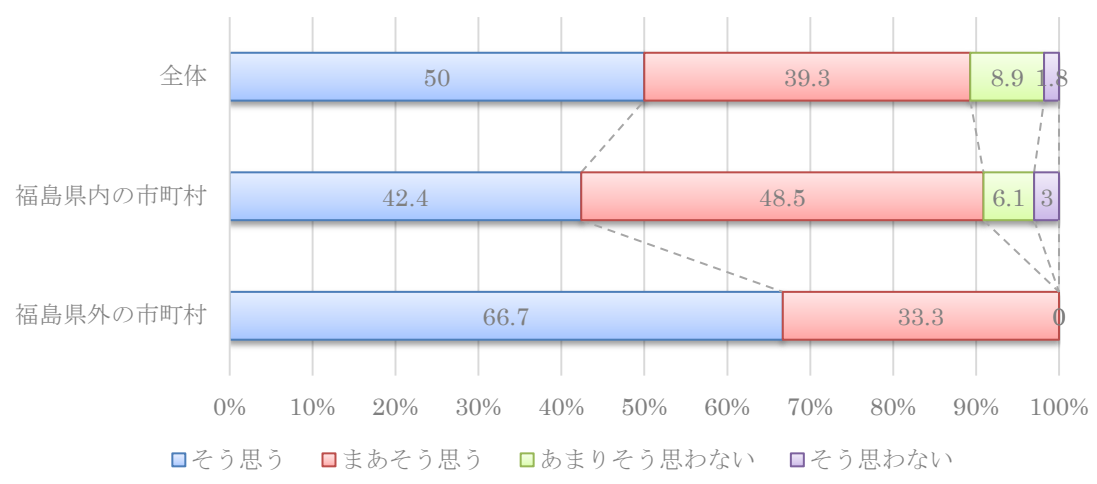
(コ)「湯川村の品物を他の人にあげたい。」

図表5-33-1より、「そう思う」が49%、ついで「まあそう思う」が40%で、全体の9割の方が肯定的な評価をしていることが分かった。図表5-33-2により居住地別のクロス集計結果をみると、福島県外の回答者は、「そう思う」66.7%、「まあそう思う」33.3%という結果だった。福島県外の方には湯川村の品物は他の人にあげたいと思うくらい魅力あるものだと評価されていることが、このアンケート結果から分かったのではないだろうか。

図表5-33-1 湯川村の品物を他の人にあげたい。



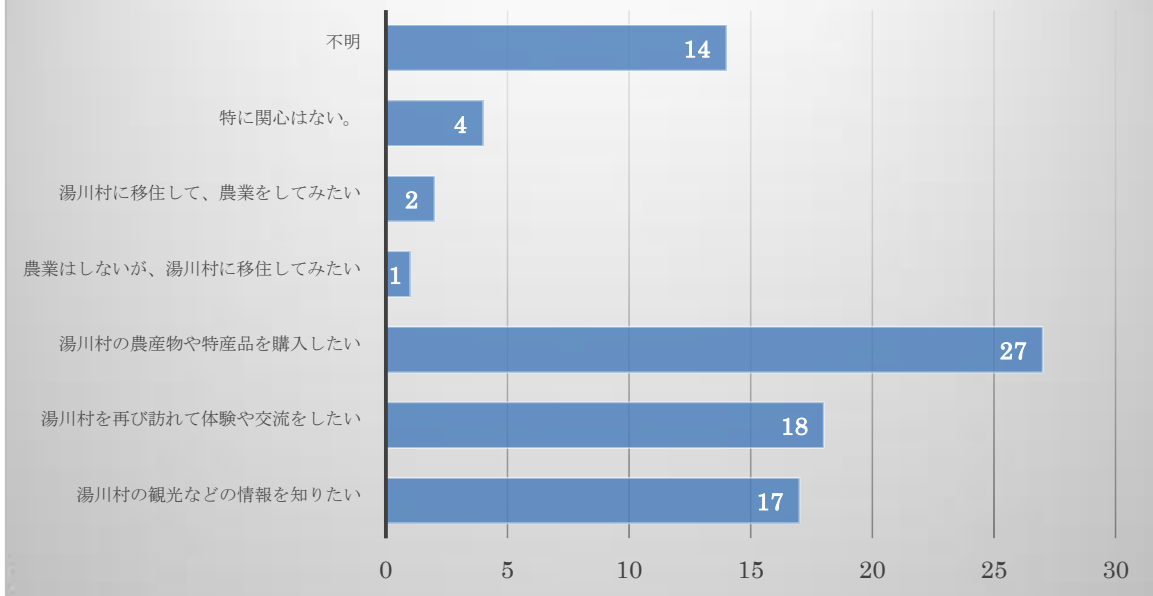
図表5-33-2 湯川村の品物を他の人にあげたい



問9 今後、湯川村とはどのように関わっていきたいか。(湯川村民以外) (複数回答)

最も多かった回答は、「湯川村の農産物や特産品を購入したい」(42.9%)であり、次いで「湯川村を再び訪れて体験や交流をしたい」(28.6%)、「湯川村の観光などの情報を知りたい」(27.0%)という結果になった。湯川村の農産物や特産品に魅力を感じる人が多いことが分かる。また、福島県外の回答者のなかには、湯川村に「特に関心はない」と答えた方はいなかったが、「湯川村に移住してみたい」という項目に答えた方もいなかった。湯川村の農産物や特産品に興味をもってはくれているが、住んでみたいとまではいかないことが惜しいと感じた。

図表5-34  
今後、湯川村とはどのように関わっていききたいか。



### 第3節 道の駅アンケート調査結果をふまえて

まず、今回のアンケート実施にあたって、63人という大勢の方からご協力いただいたことは大変ありがたいことだった。ただし対象者が道の駅利用者ということで食や農に対する意識は概ね高い人が多かったように思う。その点で偏りが見られたことを反省し、今後はより詳しい傾向をつかむために実施場所等に工夫をして続けていきたいと考えている。そのうえで今後の道の駅の取り組み方針として重要と思われる点についてアンケート調査結果をもとに意見を述べていきたいと思う。

今後の道の駅の方針として挙げられるキーワードは「食」、「女性」、「安全」だ。まず、「食」についてだが、アンケート問5の「食べることに興味がある」では全体の7割以上が食に対して興味があるという結果だ。男女問わず道の駅来場者は「食」に興味があることがわかる。反面、「食生活にお金をかけるほうだ」という問では、「かける」という答えは約5割という結果となった。食べることは好きな人でも全員が食にお金をかけたいと思っていない。食というコンテンツの中でも高価格帯から低価格帯まで幅広いニーズに対応する必要があると考えられる。

続いて「女性」について考えたい。まず一点目に男性よりも食に対する興味が強いというアンケート結果が得られた。特に40～50代の方が顕著だ。この傾向は食物の安全を求めることについても同様だ。女性は家事の中で家族の食事を担っていることが多く、より安全を願う傾向が強いのかもしれない。また、料理をすることに時間をかける人も、女性の方が多かった。

これらの結果を踏まえて、県外の人向けの企画と地元の人向けの企画を行うのが良いの



ではないかと考える。

まず、県外の人向けの企画のターゲットは40～50代の女性だ。食に興味があり、他世代よりも食にかける金額が大きい。現在の道の駅では提供していないワンランク上の食やサービスを提供できると満足度が高いと考える。また、価格帯だけでなく都市では体験できない産地との近さを感じとれるような工夫も効果が高いと考える。作物一つをとってみても、だれが作ったものか、その方はどのような人なのか、それにはどのような工夫があるのか、というような商品の裏側の情報も商品の一つとして受け取ってもらうことで、より作物の価値は上がり、消費者の満足度はアップするように思われる。

次に提案するのは地元（県内）の消費者向けの企画だ。こちらもターゲットは女性だ。しかし年齢層は20～50代と幅広い。それは作物の新鮮さ、安全性をテーマに子育て世代の方に道の駅に関心を持ってもらう。アンケート結果では、食物の安全性を重要視されている方が目立った。まずは産直の食物の新鮮さ、安全性等を実際に体験してもらうことが大切だ。その良さに気づくことによって地元の方にももっと利用していただけるはずだ。また、湯川村に住まわれている若い子育て世代に対して食の安全をアピールしていくことは、若い世代の地域への定着にも効果を発揮するのではないかと考える。

## 第6章 まとめと考察

### 第1節 全体を通じて

私たちは、湯川村堂畑地区でフィールドワークを行い、地域の行事に参加するとともに堂畑地区の住民への聞き取り調査やアンケート調査、加えて道の駅の消費者アンケートを実施した。それを通じて、今後守り続けていきたいお宝や魅力等の地域の強み、反対に、後継者不足や空き家問題などという地域の弱みが浮き彫りになった。

今、過疎・中山間地域の活性化に対する取り組みは全国で行われているものの、少子高齢化や農業の後継者問題なども加わり地方の衰退はこれからさらに悪化することが予想されている。国や自治体なども様々な取り組みをしてはいるものの、実際にそこに住んでいる人にとっては、効果を感じられないことも多いのが現実である。私たちは、実際に住民の方々にいろいろと詳しくお話を聞き、地域の方の本音を聞くことができた。また、よそ者の視点でその地域を見ることで、住民の方が当たり前すぎて感じない魅力を見つけ、地域のお宝や魅力を再発見することができた。本章では、この調査で得たことをまとめることで、私たち学生目線から考える堂畑地区の活性化の方向性について提示したいと思う。

調査結果からわかるように、住民の方の多くが集落の将来に不安を抱えており、活性化の必要性を感じている。しかし、活性化をしないといけないとは思っても、具体的に何をすることができるのか、何をすべきかがわからないのが現状であるようだ。住民アンケートでは、「堂畑地区活性化のために今後行うべきこと」として、「集落の若者が主体となった活動」や、「空き家の活用」、「移住者の受け入れ」といった回答が多かった。また、「堂畑地区が今後どんな地区になればいいと思うか」という問いに対しては、「若者の働く場所が確保されている地区」、「自然や環境を大切にしている地区」、「交通の便がよく、暮らしやすい地区」という回答が多くみられた。地区の高齢化が進む中、若者の力に期待している方が多いと言える。移住者の受け入れにも多くの方が好意的であり、これから何か新しいことに取り組む際にも協力者は多いのではないかという印象を受けた。

聞き取り調査結果では、社会情勢の変化を受けて農業だけでは将来を見据えた考えが持てないという意見も寄せられた。湯川村は福島県内有数の米どころとして栄え、ふるさと納税も活発である。また、道の駅もでき県内外からの集客の機会も増えた。そこを利点とし、地区に今あるものを活かした地域活性化のきっかけづくりが必要ではないかと考えられる。道の駅を訪れた消費者アンケートによると、湯川村を訪れる価値があり、もっと農業を大切にしようと思っている消費者が多いことから、このチャンスを活かすときではないだろうか。

消費者アンケートの結果によると、食に興味を持っている人や食の安全性を重視している消費者の割合が高く、湯川村の農作物はそのような消費者に受け入れられるものであると考えられる。そうした食に興味を持つ消費者をターゲットとし、移住定住の前段階の1

つとして村への興味を継続的に持ってもらうように情報発信を工夫していくことが考えられるのではないか。

一方、アンケート調査からは、交通の便や買い物の場所に不満をもっている住民の方が多くことがわかった。地域のハード面に課題を感じている住民の方が多く、高齢化が進行するなかで自家用車に頼らざるを得ない「車社会」化の問題が浮き彫りになった。今後は地域住民相互の助け合いの仕組みづくりなども必要になってくるであろう。また、空き家についてはIターン者の受け入れについて好意的な意見が多いなか不安もあるという意見もあった。受け入れるのであれば受け入れる地区との情報の共有を活発にして軋轢が起きないようにすることが必要である。

そうしたことを踏まえ、次の第2節では地域がもつ強みや弱みと地域をとりまく機会や脅威を掛け合わせてSWOT分析を行うことにより、今後の堂畑集落の可能性について探っていくことにする。

## 第2節 活性化の方向性について

### 1. SWOT分析のデータからの提案

具体的に活性化の案を提示するにあたり、SWOT分析の手法を用いて検討した。堂畑地区の内部の状況でプラスの面を「Strengths（強み）」、マイナス面を「Weakness（弱み）」とし、集落外の状況でプラスの面を「Opportunities（機会）」、マイナス面を「Threats（脅威）」とし、まとめたのが以下の図である。このSWOT分析を行うことによって、堂畑地区がおかれている現状を分かりやすく把握できるほか、それぞれを掛け合わせるにより、今後行うべき活性化の方向性が見えてくる。以下では、SWOT分析の結果を掛け合わせ、3つの活性化の方向性について示す。

	<b>集落内の環境</b>	<b>集落外の環境</b>
<b>プラス面</b>	<b>S (強み)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お米がおいしい</li> <li>・平野ならではの景色</li> <li>・移住者の受け入れに好意的</li> <li>・地域内の行事が多い</li> <li>・農業従事者が多い</li> </ul>	<b>O (機会)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道の駅</li> <li>・農業、食に興味を持ってる人が多い</li> <li>・新規就農者への支援制度</li> <li>・ふるさと納税</li> </ul>
<b>マイナス面</b>	<b>W (弱み)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・少子高齢化</li> <li>・空き家</li> <li>・農業の後継者不足</li> <li>・雇用先が少ない</li> </ul>	<b>T (脅威)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・米価の価格が下がってる (農業＝儲からないのイメージが強い)</li> <li>・交通問題</li> <li>・医療機関の不足</li> <li>・認知度の低さ</li> </ul>

図表 堂畑集落のSWOT分析

・農業従事者が多い×農業の後継者不足×新規就農者への支援

これによって導かれた案は、農業体験である。調べてみると、会津地域全体や湯川村の近隣地域の喜多方市などで、積極的にそういった活動をしていることがわかった。会津地域全体では、「あいづらいふ」<sup>4</sup>というサイトがある。このホームページは、福島県の会津地方の全17市町村で構成し、会津地域の活性化を図るためのソフト事業を展開している「あいづふるさと市町村圏協議会」が運営している。あいづを体験する、あいづに住む、あいづらいふをサポートするということで、様々な取り組みをしている。その中でも、「あいづを体験する」では、会津地域の各自治体で行っている体験プログラムが紹介されている。

<sup>4</sup> あいづらいふ <http://www.aizu-furusato.com/aizulife/>

湯川村のページも存在するものの、活用はされていないようだ。また、多くの皆様に会津地方への移住や定住に興味や関心をもってもらいたいと喜多方市では「グリーン・ツーリズム喜多方田舎体験」<sup>5</sup>を行っている。喜多方市は平成15年に全国の市として初めて「グリーン・ツーリズムのまち」宣言をした。地域の伝統・文化の継承とともに、自然や環境保全に配慮した地域づくりをめざし、訪れる方々と「こころと心の交流」で感動を共有する、そんなグリーン・ツーリズムをめざしている。

四季を通じて、様々な体験をすることができ、湯川村でもできるのではないかという体験も数多くあった。実際、堂畑地区でグリーン・ツーリズムを行う場合、農作業体験として米が有効であると考え。湯川米は全国的にも知名度がある。春の田植えから、秋の収穫まで一連の作業を体験してもらおう。体験するにあたり、講師となるのは堂畑に住む集落の人である。湯川村では、機械化が進んでいるが、体験では、手での田植えや稲刈りもできるようにする。また、そういった体験を行う場所は、現在遊休耕作地となっているところを有効に活用できればよいのではないだろうか。現在運営されているサイトの活用から始め、いろいろと範囲を広げていければ良いと考える。住民の方は、自分の田んぼ、畑で手一杯の方も多いため、四季を通じて農業体験を行うには住民の方の理解を得ることと行政等の支援が必要であると考え。この提案を実現するために、まず私たち学生も農業体験の事例を調べ、堂畑地区でできることを考えてみたいと思う。

#### ・農業従事者が多い×認知度×農業・食に興味を持っている人が多い

これによって導かれた案は、堂畑マルシェの定期開催である。

道の駅で開催された新米祭りの際に、福島大学×堂畑地区で行政の支援のもと「堂畑マルシェ」のブースを開いた。住民への聞き取り調査では、野菜は作っているが道の駅などへの販売目的では生産していない世帯が多かった。しかし、マルシェを開くにあたり出荷をお願いしたところ地区の方からの協力を得ることができた。実際に、堂畑マルシェは県内外から来た比較的食への安全性を重視する消費者に受け入れられ、大きく注目された。

このことから、地区の方が手間ひまかけて育てた農産物は潜在的な可能性があり、マルシェを定期的で開催することでお米だけでなく野菜の価値にも気づくことができると考える。また、生産者が直接売ることによって顔を見ての販売ができることから、より安全性のアピールや、情報交換・共有を促すことが可能であると考え。湯川村は会津と喜多方に挟まれており、道の駅でも並んでいる品はほとんどが隣町の会津坂下町で地理的認知度が乏しいように感じる。しかしながら道の駅には毎年多くの方が県内外から集まるため、そうした機会の活用の1つとしてマルシェの開催を提案したい。

---

<sup>5</sup> グリーン・ツーリズム喜多方田舎体験 <http://www.kitakata-gt.jp/>

## ・農業、食に興味を持っている人が多い×お米がおいしい

これによって、導かれた案は食文化の再発見である。湯川村は言わずと知れた米の産地であり、そのおいしさは全国的にも有名で、ふるさと納税でも大人気である。このお米をさらにおいしく食べるための「ご飯のお供」が今回のテーマである。住民調査で、地域の伝統料理や郷土料理を尋ねたところあまり回答が得られなかった。しかし、私たちが秋に収穫祭にお邪魔させていただき、お餅をいただいた際、「とうふ餅」という初めての食べ物に出会った。家庭で作られている「普通の」料理こそが、地域のかげがえのない郷土料理だという認識が必要である。また、住民の方が自家野菜で作った漬物も大変おいしく、普段市販の漬物しか食べない人にとっては感動するものにもなりえるのではないだろうか。自分で作った漬物は保存料など使用していないため売っているものよりもはるかに安全であろう。道の駅利用者アンケートでは、女性を中心に食に興味を持っている人、食に対して安全性を重視し、多少値段が高くても安心安全を優先するという人が多かった。

この結果から、米や野菜といった農産物に限らず、加工品などにも力を加えてみるというのではないだろうか。お米がおいしいという現在PRできることに、セットという形で漬物やおかずの加工品PRをすることで、さらなる効果を生むことができると考える。例えば、加工品単体で売り出す場合、独自性やセールスポイントとなるこだわりが必要になる。しかし、お米とセットであればついでに買ってみようかなという人もいるであろうし、今現在湯川米の知名度があるのでそれを利用して、販売することができる。それはまた、お米の販売の促進にもなるであろう。お米は、品種により味や性質も違う。湯川米を一番食べている住民だからこそわかるおいしい食べ方などもあるのではないか。新しく生み出すというよりは、今あるもの、昔からあるものを生かした取り組みをする方が、住民の方にも受け入れやすく、地域の本当のお宝となるのではないかと考える。

住民調査を行った際、農産物を近所に配るといふ人も多かった。また、収穫祭の時に漬物など加工品を皆が持ち寄っていた。加工品の販売には保健所の許可が必要であることから、加工品の商品化はそう簡単ではないかもしれないし、また、販売するほどのものではないと考える人がほとんどであるだろう。しかし、実際そういった状況の中、堂畑マルシェは大盛況であった。まず私たちがお母さんたちの作った加工品がおいしいということをお伝え、私たちが販売に携わるような形をとるのがよいと考える。堂畑地区には兄弟分が残っている。そういった昔から続く助け合いの制度を生かし、こういったことを始めるきっかけとなってくればよいと考える。

## 2. 堂畑地区と福島大学生の関わりを強めた域学連携を図るために

### ・堂畑マルシェ×福島大学祭

SWOT 分析から提案された堂畑マルシェについて今後も継続的に行うことに加え、福島

大学の大学祭でも行うことを提案する。堂畑マルシェの開催は地区外からの消費者にも大変好評であった。また、出品してくださった方からも、自分の野菜が売れた喜びや嬉しさ、自分の身近にあるものがお宝だと気づくことができたという声をいただいた。このことから堂畑マルシェは地域の魅力を再発見するきっかけになり、地域を盛り上げようというモチベーションアップにつながると考える。そして、マルシェを開催することによって地区外への人にも堂畑の農産物を PR する機会を生み出すことができるだろう。その一つとして大学祭があると考えている。

大学祭で行うことで、他の学生や堂畑地区のことを知らない人にも魅力を知ってもらうことができる。そして、学生を中心とした若い人と住民とが直接交流の機会を得ることでお互いに刺激を受け、農業に対する意識を変えていくきっかけになればよいと考えている。

さらに、地域おこし協力隊の方にも参加していただくことで、マルシェを通し住民との良い関係づくりへの橋渡しになり、地域を盛り上げていくことができればよいと考える。

#### ・堂畑活性化サロン×若者の力

SWOT 分析から提案された農業体験と食文化の発見について堂畑活性化サロンの実施を提案する。このサロンの内容は、月 1 回程度、学生が堂畑地区を訪れ、季節ごとのイベントの企画や、豊富な食資源をはじめとする地区のお宝を活用して交流するものである。また、私たち学生が地区に入ることによって活動を休止している青年団のサポートをし、失われつつある行事や資源についても取り戻す手助けができないかと考えている。そして、地区の方と学生が交流を重ねることで学生と地域の方々の絆を強めることや、地域の人同士の交流を生み出すことができるのではないかと考える。

このサロンを通し、よそ者である学生が地区のことを知り、交流をすることで見えてくる魅力や課題に気づき発信につなげる。その一方で、地区の方々は当たり前であったものの良さに気づくことや、地区の若い人と関わりを持つ機会やきっかけとなり交流の幅を広げることで地区の盛り上がりにつなげることができればよいと考える。そうしたことを学生が支えるために、地区の若い方と学生が新しい「兄弟分」となり、互いに寄り添えるような関係性を築いていきたいと考える。

#### ・SNS の活用×認知

堂畑地区での活動の様子や四季折々の風景を SNS で私たちが発信していくことを提案する。たとえば、前の提案であげた堂畑活性化サロンでの活動の様子や、平野ならではの美しい景色をツイッターやインスタグラムといった SNS を利用して発信していくものである。この SNS は、学生が主体となって運営する。活性化サロンの実施の予告や活動の様子などを発信していくことにより、私たち学生と地域住民の絆が強くなっていく様子を外部の人にもまた知ることができる。活性化は、一時的に行うのではなく、継続することが重要であると考えている。堂畑活性化サロンを継続的に行っているということを外部に発信し

ていくことで、ほかの提案にあげたような堂畑マルシェを福島大学の学祭で開催するといった際に、私たちの活動を知ってくれている方も増え効果的であると考えます。

しかし、このSNSでの情報発信は、湯川村や堂畑地区を知らない外部の方々に情報を発信するという目的もあるが一番の目的は、湯川村以外に住む他出者に向けた情報の発信である。私たちが行った聞き取り調査の結果からわかった他出者の人数は、20人であった。また、帰村の見通しについて尋ねたものの「わからない」「戻ってこない」という意見が多かった。堂畑地区を担う次世代の方々に積極的な情報発信をしていくことで、堂畑地区の魅力を再発見していただきたい。また、月に1回行う予定の堂畑活性化サロンの情報を発信していくことから、地域住民のみならず、他出者の方にも参加していただくきっかけとなればよいと考えます。また、堂畑地区を出なくてはならなくなった他出者の方に「ふるさと」と思い出していただきたい。私たちは、いろいろな季節に堂畑地区を訪れ、田んぼや周りの山の景色によって四季を感じる事ができた。他出者の方にも、住んでいた時の感覚を思い出していただき、日常生活のなかで「ふるさと」を想う機会を私たちがSNSで発信する写真で提供できれば良いと考えます。後継者不足に悩む住民の方々の思いをふまえ、学生ならではの方法でアプローチしていきたいと考えます。

### 第3節 地域資源

私たちは、本調査に行った際に地域を歩きまわり各自3枚以上の地域資源カードを作成した。総計60枚の地域資源カードが完成したが、ここでは、代表的な地域資源について紹介する。

湯川米は、言わずと知れた湯川村の名産品である。ふるさと納税でも人気であり、堂畑地区の方もかなりの人が米を生産している。私たちも本調査の際のパーベキュー大会のときと新米祭りのギネスにチャレンジした際に湯川米をいただいた。予備調査の時は、青い稲が一面に広がっていたが、本調査の際は稲穂が黄金色に染まり、とてもきれいであった。地域資源カードでは、お米のことを地域資源にしている人もいればその田んぼの景色を地域資源にしている人もいた。村全体の地域資源でもあるが堂畑地区の住民の方にとっても自慢のお米であると考えます。



【堂畑地区の湯川米】

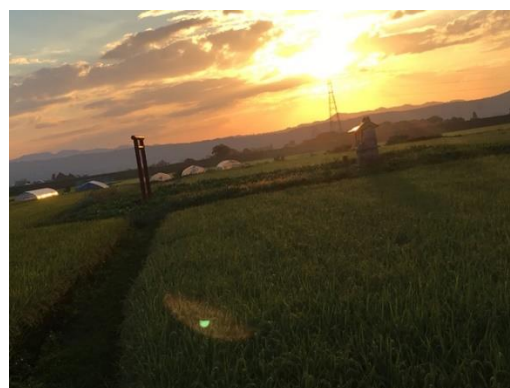


夏祭りは、飾り付けられたお神輿を子どもたちが元気に「わっしょい」と声をかけながら地区内を練り歩く。小学生ぐらいまでの子どもたちが数十人参加していた。お神輿が家に近づくと、人が外に出てくるというような光景も見られた。ただ子どもたちが地域内を歩いているのではなく、ご祝儀をもらい、お神酒を配るといったようなことも行っている。以前は、実際に担いでいたようだが若者の減少により現在の形になったそうだ。子どもたちの大きな声は、地域内を明るくしているように感じ、この夏まつりを通じて子どもたちも重要な地域資源であると思った。



【夏祭りの集合写真】

堂畑地区の景色がきれいな理由は、地形にあると考えられる。山がないため、平坦な道が続いている。田んぼが一面に広がっているところでは先の景色を邪魔するものはなく、広々とした景色を見ることができる。天気がいいと、磐梯山もはっきりと見え、住民の方のお気に入りの場所もあるそうだ。また、夕日が山に沈んでいく様子をはっきりと見ることができてとてもきれいであった。



【田んぼと夕日の絶景が見渡せる】

バーベキュー大会は、夏祭りの後夕方から行われる。集会所の外の空いているスペースにバーベキューのセッティングを行う。かなりの数の席を準備するため一苦労であった。また、U字側溝に炭を入れ、火をつけるのだが、数が多いことに加え、なかなか炭に火が

つかずみんなで団扇を使い必死に風を送った。私たちは、今回初めて準備に携わったため、楽しみながら準備をしたが、毎年行っている方にしたら、大変という気持ちが大きいのではないかと思った。夕方になると、ぞくぞくと人が集まりだし、各々バーベキューを始めていた、前にある舞台での出し物もあり（今回は福島大学のジャグリングサークルも参加）結構な賑わいであった。



【バーベキュー大会の様子】

今回、私たちが作成した地域資源カードは地域資源マップとして活用した。すべての地域資源を乗せることはできていないものの特徴的なものを複数取り上げ、学生手書きの地図で描いてある。住んでいる人にとって、当たり前にあるものでも、よそ者の私たちからすると「すごい！」というものがある。地区自体を客観視することに見えてくるものがあり、それは今後地域活性化を行っていく上で重要な役割を担うと考える。実際に作成した地域資源マップは、次ページを参照されたい。

# 堂畑地区地域資源マップ

## 養泉寺

集落の中心  
集まる場所



## 花

公園の各々の道端に整備された花が  
植えられる。集落の中心にあると  
て整備されている。花の場所  
道が彩られていく。



## 堂畑農村公園

子供達から家族連れまで楽しめる公園。  
遊具で遊ばせてあげたい。夏の思い出の場所  
ではキッズパークも有名だ。



## 堂畑集会所

地区に欠かせない場所  
なつかしい雰囲気。居心地が良い  
中には写真館や資料館、歴史を感じる



## 2つの掲示板

2つの掲示板があり、1つは農業  
に関すること、もう1つは集落に関する  
ことが掲示されている。



## 御用窓

田んぼの真ん中にある窓。様々な  
言い伝えがある不思議な場所。



## 放送局

交通安全や火災予防の啓  
蒙活動が中心で使われています。  
運動会や地域のイベントの際にも使わ  
れる。



## 堂



夕焼け

## 畑



稲穂の海

## の

## 風景



稲穂

## 用水路 阿賀川

川と水路が繋がっており、その水路には  
大きな水車が設置されている。水路は  
集落の人々が共同で維持管理を  
している。



## お地蔵さん

集落の中心にいます。



#### 第4節 道の駅と生産者の関係づくり

私たちは新米祭りの約1ヶ月後、道の駅の駅長である神田さんにお話を伺う機会をいただいた。神田さんは道の駅の運営において、消費者に飽きられないようにイベントをたくさん行うことで変化をつけ、またより良いサービスの提供に励んでいる。イベントは年間約100回行われており、1週間に2回のペースで行われている。また、商品構成の特徴としては生産者が誰だかすぐわかるようにしているということだ。生産者の顔写真の掲載や、地元の産業が直結しているレストランの存在によって、消費者に農産物に対する安全性や、地産地消の促進を図り、道の駅というブランドへの信頼を構築している。

村内の生産者に対しては、出荷するにあたり手数料を抑えることで優遇しているが、道の駅単独では生産者が出荷しやすくするには限界があるようだ。私たちが実施したアンケートの結果によると、「堂畑地区の道の駅へのお荷している」と回答したのは5件のみであった。他方で、道の駅を盛り上げるために必要なこととしては、「湯川の農産物の出荷を増やす」が全体の約40%を占め、「湯川への観光客を増やす」(36.7%)、「湯川の食材を活用した加工食品の開発」(35.4%)、「野菜作りなどの作物振興」(24.1%)、「集荷サービスなどの高齢者支援の仕組み」(24.1%)と多くの回答があった。現状では、道の駅へのお荷者はわずかであるのに対し、「湯川の農産物の出荷を増やす」という回答が最も多いという結果は、大きな課題の一つである。自分もお荷したいができない事情があるのか、やる気のある人に任せる傾向があるのか定かではないが、道の駅や農業に対する住民の意識やモチベーションの向上も今後の課題であると考えさせられた。そのきっかけづくりとして先述したマルシェの開催など新たな切り口での農産物の販売やアピールを提案したい。誰かがやってくれるのではなく地区全体となって取り組み、多くの気づきや楽しさを感じていただくことが地区の今後を築いていくツールになると考える。

#### 第5節 おわりに

今回の調査を通し、地区が抱える課題や魅力を発見について触れてきたが、私たちに地区の方々が話して下さったことはほんの一部のことかもしれない。この章で述べた提案を踏まえ、学生の立場でできることを継続的に行い、地区の方と学生が共に地区の将来を考え築き上げていければ幸いである。

堂畑地区はたくさんの地域資源があり、当たり前と想っていたものの良さや貴重さに気づくことがまだまだ可能である。生まれ育ったあるいは生活している堂畑地区にあるものを今後の地区の活性化につなげることで、地区の持続可能性がさらに高まっていくことを心から願っている。

## 第7章 フィールドワークの感想

室井 亮哉

私は岩崎ゼミの活動の一環として、湯川村堂畑地区に調査に入らせていただきました。実際に住民の方々に聞き取り調査をしたり、お祭りに参加したりということは初めての経験でとても不安でした。しかし、実際に行ってみると、住民の方々が温かく迎えてくださり、不安はすぐにはなくなりました。

聞き取り調査では住民の方々と直にお話を聞き、堂畑地区の実情や課題を知ることができました。少子高齢化や後継者不足といった問題があり、将来を不安視する声が多く聞かれました。しかし、それだけではなく、Iターン者の受け入れや、空き家の利活用など、地域活性化について前向きなご意見もたくさんいただきました。このような意見を住民の方々の中ではもちろん、行政とも一緒に共有し、議論を深めていけば地域活性化につながるのではないかと思います。

また、今回の調査では堂畑地区のお宝もたくさん見つけることができました。特に魅力的に感じたのは、地域のつながりです。バーベキュー大会や子供御輿に参加させていただき、住民の方々の仲の良さがとても伝わってきました。このような住民のつながりは簡単に作ることができるものではないので、今後も地区の行事や共同作業を通して守って行って欲しいです。

今回の調査で、湯川村堂畑の地区の住民の方々、湯川村役場の方々には大変お世話になりました。私は今回の調査を通して様々なことを学ぶことができ、地域づくりに対する理解を深めることができました。今回の私たちの活動が少しでも皆様の力になれば幸いです。ご協力いただき、本当にありがとうございました。

菅野 侑梨

私は、初めて湯川村を訪れたのだが、フィールドワークを通してたくさんのことを学ぶことができた。湯川村堂畑地区の活性化という難しい課題に対し、初めのうちは私だけではなく、ゼミも全体的にそこまで深く考えていなかったように感じる。実際に住民の方にお会いしたことで、住民の方の私たちに対する期待や不安を感じ、責任をもって調査をしないといけないなという思いに変わっていった。

本調査は、緊張していたものの想像以上に楽しかった。初めて会う私たちに、質問に対し丁寧に回答してくださった住民の方に感謝の気持ちでいっぱいである。住民調査のほかにも、村や地区の行事に参加させていただき、たくさんの方と交流することができた。運動会は、小学生の時以来で大丈夫かなという不安もあったものの、とても楽しく、大変盛り上がった。夏祭りでは、地区のこどもたちが中心に参加していたのだが、私は堂畑地区には子供があまりいないというイメージを持っていたため、たくさんの子供たちが参加していることに少しびっくりした。バーベキュー大会は、私自身想像がつかず、どういった形

式で行うのかなと思っていたので、U字側溝に炭を入れだしたときは本当に驚いた。準備も力仕事が多く大変であり、今回は私たちが手伝いをしたものの、毎年準備をするだけでもかなりの労力であるなという印象を受けた。本調査期間で、様々なことを体験し、堂畑地区について知ることができたし、自分自身で感じたこともたくさんあった。

本調査のほかに、新米祭りや収穫祭にも参加し、湯川村にはかなり足を運んだ。堂畑地区だけでなく、道の駅にも何回か行ったことでいろいろな方面から堂畑地区を考えることができたように感じる。今の生活に満足している方は多かったものの、一方で今後、車が運転できなくなったらどうしようなどと、将来に不安を持っている方も多かった。私たち大学生は、これから調査したことを生かし、また協力してくださったお礼としてしっかりと結果を残したいと考える。ないものねだりからあるもの探しと先生に教わってきたことを生かし、よそ者の視点ならではの活性化の方向性について考えていければ良いと思う。

鈴木 克明

今回の調査でイベントへの参加や聞き取り調査を行う中で堂畑地区の住民の方が温かく私たちを迎えてくださった事に感謝したいと思います。そして調査を通じて、堂畑地区が持つ魅力をたくさん発見することが出来ました。それは私が住む地元と比べて、稲作を中心とした集落内であるため住民同士の交流が活発で収穫祭や運動会などお互いに顔を合わせる機会が多い事は魅力であり、これからさらに地区を活性化していくうえでは重要な要素であると感じました。その一方でこうした行事に対して負担を感じるという意見もありましたが、規模や予算などを改善してぜひとも存続していただきたいと思いました。参加した私たち学生の目線から行事について考えてみると、住民が集まってわいわいと楽しんで活動していく事で外部の人たちも集落について興味を持つきっかけになると感じました。

また農業についてお話を聞き、実際に田んぼを見せていただいて気づいた点として他の地域と比べて区画整理が進んでいて阿賀川からの水量も豊富で稲作を行うにはこれ以上ない良い土地であることも強みであると感じました。また新米祭りの際に私たちが行ったアンケートでは、県外の方も湯川米の品質の高さを認知していて道の駅での売り上げも上がってきているので、後継者問題を解決して農業を維持していくための取り組みをゼミ活動で引き続き検討していきたいです。今回の調査を通じて、堂畑地区と関わることが出来て住民の方と交流することが出来たので、この出会いを大切に交流を続けていきたいと感じました。

佐藤 駿

最初、予備調査を行った時にはこれからうまくやっていけるかとても不安でした。しかし、本調査では聞き取り調査を通して、地域の方とお話をして、どのような考えを持ちながら生活しているのか、地区に対して何を思っているのかなどを知ることができました。また、地域の方はとても親切で、聞き取り調査もとても円滑に行うことができました。湯川村の運動会に実際に参加しましたが、自分が思っていた以上に盛り上がり、私たちよそ

者が参加しても、温かく受け入れてくださりました。私は運営の方の手伝いもしたので、準備から片付けまで運動会を知ることができました。準備の際には、みなさん様々な地区から集まったにもかかわらず、淡々と作業をこなし、普通ならもっと時間がかかってもおかしくないところ、一人一人が役割を認識しているため、予定より早めに準備を終えることができ、これを通して、湯川村の方々の団結力や地域力が分かりました。運動会後の子供神輿やバーベキュー大会では子どもたちや地区の方と交流でき、たわいもない会話から今回の調査のことまで、本当に楽しい時間を過ごせました。堂畑マルシェや新米祭など普段は体験できないようなことも地区の方と一緒に行動することができたのは、すごく良い思い出となりました。

私たちよそ者の視点で、これまで地区の方が当たり前だと思っていたことから、たくさんお宝や良い所を見つけることができました。堂畑地区に入ったのはたった数日間でしたがそれ以上に住民の方、堂畑地区を知ることができ、この縁を大切にこれからも継続的に交流ができればと思っています。調査からイベントまで私たちに協力していただき、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

三浦 美優

湯川村での二泊三日のフィールドワークは、私自身、初めてのフィールドワークであり、とても緊張しましたが、とても素敵な思い出となりました。

一日目は、調査メインだったため、調査に入った住民の方としか関わることが出来ませんでした。二日目には、湯川村の運動会・堂畑集落のお祭りとバーベキューに参加することによって、たくさんの住民の方と交流することが出来ました。

運動会では、村の地区同士集まって運動会をするということ自体に最初は驚きました。これまで、地区でのお祭りといった、地区内の行事というのは自分の住んでいる地域で行ったことはありますが、村という規模で行うことは経験したことはありませんでした。湯川村の運動会に参加してみて、オリジナルの T シャツをつくっている地区や、横断幕や待機所テントに飾り付けしている地区がありと圧倒されました。今回福大卒としてゼミの仲間たちと出ましたが、わざわざゼッケンを用意して下さい、とても嬉しかったです。種目の待機中には、村民の方々とわいわいお話しすることが出来、とても楽しかったです。個人的に気になったこととしては、湯川村の運動会で、2～3くらい運動会に参加していない地区があり、何か参加できない理由があるのかなと気になりました。ですが、運動会に参加してみて、村民の方々も楽しんでおり、私たちも楽しむことが出来ました。来年もぜひ参加したいです。

運動会後、堂畑集落でのお祭り・バーベキューにも参加しました。お祭りでは、最初にお神輿と子どもたちと親と学生何人かで記念撮影を行ないました。集会所にはこれまでのお祭りの写真が飾ってあり、今の子どもたちの親が子どものお祭りの写真もたくさんあります。集落の方々にとって、懐かしいと振り返る起点となる記念写真に立ち会い、お神輿始まっていないのに感慨深いものがあると浸っていました。子どもたちがお神輿をひきながら、通っていく姿をみている集落の方々は、子どもたちをととても優しく見守って

いて、それを見てほっこりしました。

バーベキューでは、住民の皆さんがたくさん野菜を持ってきてくれて、おいしくお腹いっぱいいただくことが出来ました。一日目に調査に入った住民の方から「宅配便リレー（運動会の競技）にでてたねー！」と声をかけていただき、また、調査に入っていない住民の方とも話をしました。ときには「嫁に来なー！...息子まだ小学生だけど！（笑）」と冗談も交えた話もしてと、わいわいした雰囲気でも楽しかったです。

一日目と三日目に行った聞き取り調査は、初めて行うというのがありますが、毎度毎度、緊張しました。ですが、皆さんあたたかく迎えてくださり、聞きにくいことをたくさん聞いているにも関わらず、話してくれて、もてなしてくれてと申し訳ないなと感じてしまうほど、みなさん歓迎してくださり、とても嬉しかったです。調査をしていて、印象に残ったのは、昔よりも子どもがすごく少なくなったという話です。昔は堂畑地区には、青年団というものがあり、春のお祭りの運営等を行なっていたが、子どもの人数が少なくなったというもあるせいか青年団が維持できなくなったと聞きました。自分が昔入っていた青年団がなくなってしまってすごく残念、お祭りの運営も難しくなったなど話を聞いて、難しい問題だけでも、青年団こそ若者の力が集まっている集団だと思うのでなくなってしまふのはもったいないと感じました。

今回、フィールドワークに入って、二泊三日毎日充実していたなと感じます。調査に入って、堂畑地区の皆さんが温かく迎えてくれ、たくさん思っていることを話してくれ、本当にありがたく感じました。これからも訪れることがあると思うので、もっと堂畑地区の皆さんとのきずなが深められるといいなと思いました。堂畑地区の皆さん、二泊三日間ありがとうございました。

筒井 聖大

私は今回湯川村を調査してみて湯川村の現在おかれている状況や課題などたくさんのごことを知ることができました。フィールドワークは1年次のゼミでも行ったことがありましたが、自治体と協力して実際に住民の方々と直接お話をさせていただきながら調査したのは初めてでとてもいい経験になりました。

湯川村の調査は事前調査に始まり、2泊3日の本調査、堂畑地区の野菜を販売するマルシェを開きギネスにも挑戦した新米祭り、堂畑地区の収穫祭ととても内容の濃い調査となりました。私は収穫祭には参加できませんでしたが参加した人の様子を写真で見てとても楽しそうだったので行けなかったことを後悔しています。本調査の2日目では村の運動会にも参加させてもらい、夕方からは地区のお祭りにも参加しました。運動会では特別に福島大の枠を作ってもらい、お祭りでは御神輿やバーベキューのお手伝いをさせてもらいました。よそ者の私たちを村の皆さんは歓迎してくださりととてもうれしかったです。

私の実家は会津若松の南側の田んぼが多い地域で現在は委託をしていますが、祖父が元気なころは田んぼで農作業をしていました。私も小さいときは一緒にコンバインに乗ったりイナゴをとったりしたことがあり今となってはとてもいい思い出です。今でこそ新しい家が増えましたが、もともと集落であったことから昔からある家の人はお互い「村の人」と呼び、地域のつながりもいまだ維持されています。そういう地域で育ったからこそ湯川



村、そして堂畑地区の状況がどこか他人事じゃなく、聞き取り調査をしていて共感できることも多かったです。

今回調査報告書をまとめるにあたり村と住民と道の駅、3つの視点で考えると問題はとても複雑で、私たち学生が数回関わっただけで到底解決される問題ではないということを痛感しました。私たちは長くてもあと1年しかゼミ生として関わることができませんが役場、岩崎ゼミをはじめとした大学、そしてなにより当事者である住民の方々には長い目で関わり、取り組んでいってほしいと思います。最後に調査にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

関 瑞己

私は今回湯川村堂畑地区に初めてフィールドワークに入りました。今までのほかの地域へのフィールドワークは役場の方やNPO法人の方への聞き取りが主だったため、地区内におじゃまして直接お話を伺うのは最初は不安でした。しかし、多くの方が親切に対応してくださり、また地域の問題への関心も強かったため、安心して調査にあたることができました。

調査の際に感じたことは、よそ者の視点で地区内を見てみると堂畑地区は魅力にあふれているということです。住民の方に「この地域の魅力は何ですか？」という質問をすると、はじめは「なにもない」と答える人が多くいました。しかし世間話に移ると自然の豊かさや地域内のつながり、人柄の良さなどといった地域の魅力がどんどん出てきました。住民の方々は「こんななんでもないよ」といった風に話していましたが、私たちにとっては他の地域にない立派なお宝であると感じました。こういったお宝を地域の人に気づいてもらい、地域の人と協力して守っていくことが私たちに求められていると思いました。

今回の湯川村堂畑地区の調査は私にとって、とても有意義なものになりました。私たちが調査した内容が少しでも地域の活性化に役立てればと思います。役場の方や道の駅の駅長さんならびに堂畑地区のみなさま、ご協力ありがとうございました。

高橋 直也

平成28年度の岩崎ゼミの活動で湯川村堂畑地区にフィールドワークで調査に伺い様々なことを学び体験させていただき、貴重な経験になりました。

岩崎ゼミでフィールドワークに参加するまで、私は湯川村についてまったく知りませんでした。フィールドワークで堂畑地区の住民の方々や、湯川村役場の職員の方にお話を伺い、少しでも湯川村、堂畑地区について知ることが出来たと思います。

聞き取り調査では、初めての聞き取り調査で緊張している私たちに対して、堂畑地区の皆さんは親切かつ丁寧に私たちの質問に答えていただき、堂畑地区の皆さんの優しさを感じることができました。

調査二日目の湯川村の運動会や、その後のお祭りに参加させていただき、堂畑の子どもたちの楽しそうな笑顔を見ることができ、この子どもたちは堂畑の宝物だと感じました。

子どもたちも私たち大学生を怖がることなく接してくれて、私たちも元気をもらえたような気がします。また、その後のバーベキューについて、住民が集まってこのようなイベントを行うこと自体が私にとっては新鮮なことでした。私の地元ではこのように住民があつまって何かをすることはありません。私たちはカキ氷を作ったり、会場の設営をしたりと、とても貴重な体験をすることができました。頂いたお米や野菜もとてもおいしかったのが印象的でした。堂畑自慢の食材だと思います。

また、道の駅にも伺い、とても雰囲気の良い道に駅だなと感じました。新米祭りでは、道の駅に多くの観光客が訪れていて湯川村はすごいところなんだなと体感しました。また、新米祭りでは運営側の仕事を少しですがお手伝いさせていただきました。

今回の調査では私たち大学生という「よそ者」目線で堂畑地区の良いところを見つけることが出来たと思います。一方で、堂畑地区の課題も今回のフィールドワークで知ることが出来ました。若い世代が減少して神楽を開催することが出来なくなったこと、後継者の問題、道の駅への出荷に関する課題などが分かり、今後どうして行くべきか、これから堂畑地区の方と一緒に考えていくとともに、私たちからも提案していきたいと思います。

砥石 瑞基

堂畑地区でのフィールドワークが始まる前、私は少し不安でした。これまでの学習でフィールドワークは行ってきたものの、それは住民側からの話を聞くもので、今回のような対話の形でのフィールドワークは初めてだったからです。しかし、その不安はすぐに吹き飛びました。住民の方々は優しく、また、とても熱心に話をしてくださったからです。

9月に行った本調査では住民の方々と触れ合いながら堂畑地区の問題について考えることが出来ました。なかでも本調査2日目はとても印象に残っています。この日は午前中に村内運動会への参加、午後は地区のバーベキュー大会へのお手伝いという、一見調査とは関係の無いように見える活動でした。しかし村内運動会では突然の参加だったにもかかわらず地区の皆さんと協力しながら、運動会を盛り上げる事が出来ました。また、聞き取り調査では時間が限られていたため住民の方との対話はやや型があり難しい内容での会話でした。しかしバーベキュー大会の時は違い、時間も長く、少しお酒が入っていたためか、お互いの出身地の自慢や住民の方の人生譚などラフな内容で会話することが出来ました。調査の直接的な進展は無かったものの、この2日目を通して住民の方々と距離をより縮めることができ、その後の活発な意見の交換につながった活動でした。

私は堂畑地区の住民が調査に参加してくれたことで、現状に合った・住民の考えと結びついた提案ができたと思います。私は事前の予備調査などで堂畑地区のことを知った気になっていました。しかし住民の方と密接な対話をしたことで、新たな課題の発見や、私の考えていたよりも深刻ではなかった課題に気づくことができました。このことから文献では分からない住民から見た堂畑地区について知ることができ、真に現状を反映した提案をすることが出来ました。今回のフィールドワークを通して、私は調査の際に現地の人が参加することの大切さを学びました。

最後に、フィールドワークを行うにあたり堂畑地区の住民の方々、役場の方には大変お世話になりました。特に住民の方々には聞き取り調査は初めてだったため、上手く会話が

続けられず、予定の時間を過ぎてでも終わらないこともありましたが、住民の方の気遣いと役場の方のサポートのおかげのおかげ無事調査を終えることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

渡辺 貴洋

今回の湯川村へのフィールドワークを通し、実際に地域に入って活動することによって発見される魅力や課題に触れる機会が得られたことが貴重な経験であったと感じました。また、そうした魅力や課題に気付けたということが何より活動に携われてよかったと思いました。例えば、住民の方との交流はもちろんですが、地区対抗の運動会やバーベキュー、新米祭りなどその地域に入らないと知らない楽しさを知ることができたことは、湯川村でしか味わうことのできない魅力であると思います。また、学生の立場での課題の発見・改善について実際の体験をもとに課題の発見から改善に向けた過程も知ることができたことは学びにも繋がったと思います。

自分自身、普段生活している中で当たり前と思っていることは多々あります。それは多くの地域や人にも共通する部分であると思います。しかし、今回のフィールドワークで当たり前だと考えているものは地域によって違う場合があるのだと感じました。言い換えると、その地域で当たり前と思っていることは他の地域からすると当たり前ではないものであり、地域の資源になるのだと感じました。

今回のような地区の交流やつながりは一度きりで終わっては効果が出にくいと思います。そのため、今回の縁を大切に今後とも継続して取り組みたいです。まだ1年目ということもありまだまだ知らないことが多いですが地区の方との交流を通しこれからたくさんの方に気づいて行けたらよいと思います。

堂畑地区の方々や役場の方と関わりを築けて良かったと思います。協力して下さった方、私たち学生を地区に受け入れて下さった方、本当にありがとうございました。

深谷 怜

私は今年度の調査を始めるまで湯川村を知りませんでした。しかし、1年間の活動を終えて多くの湯川村の良さを発見することができました。

なんといっても初めて訪れた時の一面の田園風景。360度どこを見ても田んぼが広がっている景色は非常に印象的でした。様々な地方の市町村を訪れたことがありましたが初めての感覚でした。

次に感じたことは地域の皆さんの温かさです。事前調査から、本調査まで湯川村について何も知らない私たちに様々なことをお教えいただきました。本調査の合間の休憩時間には自家製のトマトジュースを頂いたり、お漬物を頂いたりしました。初めての地域で少し緊張気味でしたが温かい歓迎をしていただいたことで充実した調査にすることができたと感じています。

今後はこの一年間の調査をふまえて湯川村堂畑地区の皆さんに還元していくことが重要だと感じています。学生の強みと地域の良さを活かしながら様々な活動に取り組んでいき

たいと考えています。

2016 年度 福大ゆがわ調査隊 参加学生  
(行政政策学類 3 年)

伊藤 亨太	蝦名 智美
大越 惇	菅野 侑梨
黒澤 純也	後藤 誠智
佐藤 駿	鈴木 克明
関 瑞己	高橋 大智
高橋 直也	筒井 聖大
手塚 健太	照井あすか
砥石 瑞基	深谷 怜
三浦 美優	室井 亮哉
森 耕平	渡辺 貴洋

指導教員

岩崎由美子 (福島大学行政政策学類教授)

2016 年度福島県大学生の力を活用した集落復興支援事業  
福島県湯川村堂畑地区 調査報告書

編集：福大ゆがわ調査隊・岩崎由美子

発行日：2017 年 2 月 28 日

連絡先：〒960-1296

福島市金谷川 1 番地

福島大学 行政政策学類

岩崎研究室